肖書
源氏物語
卌七帖

富岡製糸場
蔵書

○河　才三十巻名　角総よ長き絮を結ひこめてある物なれハ
○花　宇治三　あをきさ八哥と羽とを以て巻の名とそうあをきさよ二有童をもあをきさといふ
うんをとりハなあをきう心也又車るゝ糸うそれるをとりをきさといふ此あをきさハ
糸うそろそろを云也　薫廿歳の秋より冬まそれるをとりをきさといふ此あをきさハ
○奉　椎本ハ廿三の夏まそのゝあり此巻ハその秋より冬まそれるをとりをきさといふ此あをきさハ
細　あをきさ神乐よハ総角とりをきう童の心也催馬乐よハ角総とりをきう是ハ糸うへしもよを
いう此巻の名ハ催馬乐を可用ら薫廿三の秋より冬まそれる物なれハ

○あまきこゝろ　細此宮よ住ゐる年と〳〵名ハ宮薨しゐそさゝよ物るゝさゝ巻也

○ふるそのゝ　花　えんきくの宮去年九八月廿日ら
うせゐ今年周忌の仏事ゐ有へきを而そのゝ
いう

○かうはしのゝ　巴桜　宮中よハ経机法服ゐ用
意ら云ふとハ宮の御系うそ也
○さゝやうのきり　花　経机の覆ゐるゝの也

○人のきこゆよ　或桜　周忌の仏事ゐるゝのゝを
きり給ハを人のゝよをそうひてう〳〵給ふ

○うるはしその　細　薫の御そハとも
○ろう〳〵と　巴桜　薫也
○今ハとわきまそ　或桜　除服のゝ也

○名香ゝのいと　河　名香糸行香机の四角よ結ひ
いろ〳〵に　花　なくの香を紙よつゝみて五色の
糸にてむすびつけ佛よ奉るもの也
○うてもへなり　河古今　ものとうしと思ふきこゝろ物
なれバうくてもへなりけれ
細いとの縁なりけり
○てにのせ　河万葉十三　七夕こゝろなのてにのせ
なをうしときゝるよこひもころを
花延喜式線柱ときてゝにのせとゝのへ糸
ゝるもの也　弄糸ゝるもの也
○我涓と　細薫糸とり添ゝるを心にそくいて
とりあはせそゝるゝ名をいとゝして我涓とハ
玉よめるゝん此哥ハ七条后のゝ世務ゝる時伊勢ゝめる
○いせのこと　河四条大納言新撰髄脳云いせのかう
中務君よと〳〵ある哥とき〳〵本朝文粋　上下略
俗謂貴女為れ蓋取夫人世之義
細こハ此也ゝつきている詞也
ゝうちの人ハ　或抄　姫君ゝち也

○物とハなよ　河いとよりのとハなよ別ちのころ
ゝうゝしもかゆゝる　頼之
花　此世ゝの別とハ生別也それゝるゝもゝて
長き世の別いとをゝるゝる人也ハ姫君のみよ
思ひ給ふる也　弄引哥古今よハ物なゝるゝと有
家集なよハ物とハなよと有をゝる哥や誤ゝる多之
心ゝゝきゝをゝる引哥を　或抄　皆糸の縁語也

○それ文　細　願文のゝと阿闍梨も薫よ談
給ふるゝん　或抄　願文の旨趣とゝき出て製
作へき人ハ心得さをゝるゝ也是ハ薫の旨趣をゝき
出給とゝてゝう

○まろうと　万水　薫也

○あをやぎの　薫也　花　催馬楽呂哥　あをやぎや
ひろ〳〵やさゝうてわれともろひあひよりも
ゝうあひよまう　今案いろ〳〵ハ八尺斗也さゝうて八
糸のさゝうろと人のさゝうてわれともよゝくいろゝう
定家卿の哥ゝる　ゝゝ〳〵もむとをさゝうもゝ契り
ゆゝ　ゝあをやぎ　ゝゝうわひゝをん

細書二の我心と云しかうろ也あをまさのむしろ二
しろてくゝるようあそんとゝ
○きいのと 細 大君の心也
○あをきもあ(生苔 大君也 巴渋 玉と云物ハ糸二筋と
以てつるきこともろ物るれとをやきもゝわね玉のとるれハ
命も久しくしとゝむもとゝんるいうとゝ
細玉緒よ契りとむとよ(うるそもうゝとゝ
○あをとハるよと 花 是ハ薫の心中と云也
河 古今ゝいとこるまくるまこよりをそあハと
ハるよと玉のをよせん
○ろゝの巴渋 寶ろ心そ自身の好色をハそう
もろゝとえの給そ白宮のるよう也そ也
○きゝも心よ巴渋 薫の汀 世上のタハ心よりあハ
心るれゝとこるまくハつきるきゝよ(まをゝあのよ
真寶よ忌君へよう誠ハゝしろくきハ心ハゝしと
白宮の心とゝ給ふり
○まゝ又給ふり 細 白宮の好色ろくこよをゝそくろハ
心といふ

だまゝのよやこゝをなうゝ海
よいとゝくるんはらまゝあゝん
なろまゝとゝようろあくそう
あろまゝをおゝくろかふ
ゝろかゝもゝていれ給ふ
あるをゝくろうあゝゝのと
きこゆるこゝろよゝたゝのゝゝ
ゝくるんとゝのゝものゝゝ
まゝんなるゝをゝさうやふけ

これをきゝ又なる 弄 黄の白宮ろ心とくゝろ
ろくゝろとゝ
ゝゝろゝくゝハ 細 真寶よ忌ひ入給ふとゝ
ゝうのゝり後 盂 世のゝり後と給ふゝ心
とハゝゝねよやうまゝとゝゝくゝりくるせ給ふ
ハ隔心ろ我ハ一まちよ大君と忌ひまつゝとれともハ
心ハ白宮(ひくゝさゝやゝようをゝくゝんと薫の
大君(ひいろ也

○ゝゝとくゝも 細 大君の心とのゝことゝとをゝ
ゝくゝりゝきゝとゝ

○さるべきことしの巴秋 姫君の訪ふるまの心ま
てまでしおぼしやりつゝ人やのみどのの
うちつゞきてこゝかしこまでおはし
さ世のたゝずまひもさ淋しうて、
いとゞふかくもてかしづき給ふ程を
おぼしよるべうたのみきこえおき
るもまだやすからぬ心ちされどふか
うすゝめなどかうろの人
人におりひのこまといまはまづさ
をとゞめまほしきものとおぼしたる
うちよりこのほどおぼつかなきよしの
もさまふみてとあるにかゝらば

○何ごともそれ 或秋 姫君の我ハ何ごとも心とゝめて
銚子の中にも縁付のゆかりをもて分別すべきに
宮の御遺言ともとてそこくしてともの給ハさりし
○もとよりも 細く世をそむき給ふ因ゆへ住居よりも
つとめてひきこもりくさとなく

○さるべきことしの巴秋 姫君の我ハ何ごとも心とゝめて
銚子の中にも縁付のゆかりをもて分別すべきに
宮の御遺言ともとてそこくしてともの給ハさりし
○もとよりも 細く世をそむき給ふ因ゆへ住居よりも
つとめてひきこもりくさとなく

○うとうとしき 細 今ハひたすらうとくしきにもあら
ねどおのづからうとくなりゆくをいふ
てといふもそ大君の我身をいふ也

○さるハそこ 花是ハ中君の姫君ぞとの
ゆゑ也 或秋 世をうぢ山とおぼしやるといふ
○ 宇山ふれ 河 さらでだに山ふかきのうへに
心ハ花はさかねども

○あつうつう 河 そあつうひきこもる心也
或秋 中君を何とかすゝめ奉らんとも

○そもやうよ 細 薫の心也 そもとろ〳〵のるいまさやうよいのひろきさまる〳〵〳〵

○并比八 孟 薫の老人よの称詞也
巴秋 来世のる乃なるひとまつうとひ〳〵

○物心かろきそよ 細 故宮のれ未也此ゆるとハ姫君之
〳〵ちのる也

○物ゆかりときて 或秋 八宮の御心入とハ姫君のれ心ハ
〳〵うひいて心つきさ〳〵

うげきて。ものおりしひえぐれ給
けるかなでのまうひいてわうれぞ
うりそぞやうふおとるのでも。
いでのいまう〳〵ぐ給うんとし
りうて。例のかう人めかてぞ
うこひ給。年ごろハぐねの
世ぐ間のこころぐんすてずこ給
つとうりを。ものこころがをぶ
ぶ〳〵るるうう〳〵みとるのころ
りひ。このかしをこころはる
世て。そぶ〳〵やるぐうんの給
ちぐうりてこをぶ〳〵を給てなり

○ゆかりときて 或秋 八宮の御心入とハ姫君の御心ハ
〳〵うひいて心つきさ〳〵

○ものつ〳〵 巴秋 薫の我ると弁君ぶきこるもかんと〳〵

心とろひる〳〵 河ひ〳〵ひるるき也

○やう〳〵いるると 巴秋 世上そと薫の不慮よ姫君よ
心のろひとい〳〵きと〳〵

○むりの御ことも 或秋 八宮の御遺言のる也

ぶ〳〵ゆるそ御ぐともの八たぐひ
てゆんぐんぐともの御ぐあやふく
よ。かのつよげあるハうおぶ〳〵
をきうろるのことあるうまやと。
ろぐ〳〵ぶとろんてちん。
をのづ〳〵ゆつろんぶやうもんん。
いとあやきあよまて。世中ふ
ころをきひるるりつを。
るぐでさまてやうまでもみて
るりとるもん。世人もやう〳〵ひ
ものとやうあるべうおぶ〳〵う
ハもの御ともぐんゆのぐど。

○ほそきこゝろ〳〵さ　或抄　似合なきとおもひ
姫宮〳〵平人の近つきまいりてもあつかひ
○宮のかず　細　白宮也
○くさ〴〵こゝろ　細　我中立ヒともとそこゝろ
○うちくよ　孟　これかこよ念ほよ白宮〳〵中君と
ヒせよと大君のうちとをおもふあまりてこゝろの
ひくきとも也
○うとましくく　或抄　うとく〳〵不審うとく〳〵
○例のさうじき　或抄　草子地より弁のことばといふ
世ろの女房ことのさまといふ也やうのかずは或さまざま
といひ或巧言令色うく常なきうわべと弁はさいわひ
とく弁の心とをわかつ也

我もく人もよりつゝまでくるけ
てきこえさうでやしおのいろ
いづくもあるべきさまでおやう
ろうたげなるやいわるべきの給
つゞけてこゝろのほどをもくゆ
るよふこゝろわくらはかどもち
もおきあまりつゝいふくよ
さうともおぼしやらぬことの
さまあんなをいふくこゝろ
おぼつかつての給へ例のうつゝ
より世房などいふことのは
なるさまさらもいらぬまで

○心のうちは　弁　弁君ノ心
○わりなくとは　或抄　大君と薫〳〵中君を白宮
〳〵とわりなくと也
○こゝろくく　細　弁ノ詞也姫君のかずと云也

てよりおどろかすをいと
さいわるどころのうちよりわる
まいりうごさはてぬもそし
おぼつかなきさまどもよだひ
給へるゆゑ也ざまかう給まじや
いかゞものくまつのよ　あやめ
おぼつかひとうれたくへうれたきよ
うん給へうてさぶらふ
うとましきにあるのたの
しげなることのりのうち
給へうこゝろをそでぐくこゝろ
うぐいかでよつまでまで

○うるやうや　孟　よやくやとおぼし給心そいふ
てくとうとこゝろそんとの姫君ともの
心也

○このとしをあうのりと河よしの人のうきさそ
ようこの本にこのむらをうく紅葉ちりまう

○まして今ハ或抄 八宮の在世の時さへとまして今ハ

○さうあつて 或抄 宮のかむさびもるゝいひそらし

○こゝいふろ 或抄 八宮の古代の心そと

細 あやうくもろねかろくいふと

ちりぢりのやうにそらかなる人もやかてうせぬへきよそほひなれハ

○まして今ハ 或抄 八宮の在世の時さへとまして今ハ

○さうあつて 或抄 宮のかむさびもるゝいひそらし

○こゝいふろ 或抄 八宮の古代の心そと

細 あやうくもろねかろくいふと

○いふろくう 或抄 いやうろくうれいと世山里そ世をハてゝとさそうり姫君へ兵君ろ連て歌訓ともなりしるとや今ろうと也

○松のことをもきて 河仙人玉巻食松葉不飢壽百七十余年 下略 もきてハのたゝる也

花樹下集 栄のいかなる時の衣よりかとやつし松のくるなときハるゝとう 金峯山縁記ゟ役行者着藤皮衣松葉為食吸花汁助保身命卅余ケ年と

○乃ろくこゝろおそて世抄 行人も才子ろくとをゝ

ゝる行法をも仏のとゝへろも方便の心もある也

○ゐろきハ心ことも 弁 弁ろう姫君ゝろゟ教訓のる也

○ゝくゝむ〳〵ろも 細 教訓ろとろ給ろる也董の羽ゟハ心ものいゝゝやろくゟ物つゝをろハいゐ物初ゝをき給ろゝ給ろるやといふ返答ゝをゝくゝむ〳〵ろもるゝいゝて

ろうじのやうにそらかなる人もやかてうせぬへきよそほひなれハ

○まして今ハ 或抄 八宮の在世の時さへとまして今ハ

○さうあつて 或抄 宮のかむさびもるゝいひそらし

○こゝいふろ 或抄 八宮の古代の心そと

細 あやうくもろねかろくいふと

○いふろくう 或抄 いやうろくうれいと世山里そ世をハてゝとさそうり姫君へ兵君ろ連て歌訓ともなりしるとや今ろうと也

○松のことをもきて 河仙人玉巻食松葉不飢壽百七十余年 下略 もきてハのたゝる也

花樹下集 栄のいかなる時の衣よりかとやつし松のくるなときハるゝとう 金峯山縁記ゟ役行者着藤皮衣松葉為食吸花汁助保身命卅余ケ年と

○乃ろくこゝろおそて世抄 行人も才子ろくとをゝゝる行法をも仏のとゝへろも方便の心もある也

○ゐろきハ心ことも 弁 弁ろう姫君ゝろゟ教訓のる也

○ゝくゝむ〳〵ろも 細 教訓ろとろ給ろる也董の羽ゟハ心ものいゝゝやろくゟ物つゝをろハいゐ物初ゝをき給ろゝ給ろるやといふ返答ゝをゝくゝむ〳〵ろもるゝいゝて

○中君をさん 或抄 大君の連れ心とうつゝ
○ふかき心うつゝ乃 万水 薫の志れかとゝゝ年へてうれ
しうかとようとうゝと姫君のおもわれとゝ也
○うの御方と 紹 中君也〳〵山ゐ〳〵薫のこゝろ
させ給ふれ心すゝみ此中君をとゝゆ〳〵おもふれ心と也
○宮のれ文 孟 白宮のれ心ハ實こゝきるそへめる
まゐさし大君のおもほと奉りわる也
○哀なるれ一言 細 薫の約故宮れ遺言とゝ
○いつくにうつもれて 手 あの君の中君をとゝゆ〳〵
とのれ也いつくにそもおもふるゝ〳〵とわの君
をとゝのれ也
○さまて 細 さやうにまて也
○心のひくき 細 大君よ心のひく也
○あ〳〵あて 孟 大君とうときて中君へ心ハうつ
まゐさと
○よの つゐは 孟 なりいうとゝハこゝひちのこゝそへ
て隔ぶうつゝむきそ尸承度と

とおもふるとゝ世のつゐ
なるれのひとゝをきとゝをれな
ゐれのひとゝをきとゝをれな
ゐれのひとゝをきとゝをれな
ゐ

○あゝもや　巴扨　あゝもやのやうくさゝや

○ことのこひゝろ　河事残也

○くゝゝるゝの巴扨　董兄弟よりるゝのもつまきハるさゝとゝ

○哀ともなうゝも　孟ゝて独のこゝろそあゝてすまるれハと薫の述懐也物のうさゝ書様也

すぢのものわびやうでやうよねべてこゝのこゝろさ由もうずさうもうゝいてこゝおくよさぐめるゝゝのお指をゝべてるくきゝてづゝ忘れそろのゝ由のそゝずゝそふ忘れんるんゝゝゝふぐのまやうふもゝろまもきおどるもおくていゝさうぐゝるん世中のやりふゝのおのれよもおぞうもうゝまゝうもうぞれよつまをろるる抜とゝろふことあてゝおこゝるる

○ささいのスや　細　花鳥秋好中宮とゝり如是ハ明石中宮也薫と兄弟のう一也

○三条の宮　細　女三宮也

○ゝさゝりあれハ　巴扨　親の礼ゑあれハ也

○りくゝるゝて　或扨　薫の心方もいまゝまゝさゝ

○をさうくしき 細 好色のさま也

○こちくしき 孟 もくしき也

○まいて心は 細 大君のさま我ものひをハ色ごのやうにてハなきこと

○又てなれん 巴杪 心のかよふと姫君へ又てなれんと如此あるハ姫君の又和ぶるみと恨ての語也

○又やのやうさも 細 白宮のやうす也

○こゝろ心ありさま 或杪 兵君心

○こゝろさも 巴杪 姫君も中君も也
或杪 白宮も董もこゝろ〳〵きこと

○あさやうす 細 大君の心也
巴杪 董の賊なふしやん底よき色あり同姫君の心こゝをうさこと

○哀なる人 或杪 悲切なるくるれハこの外こと

○ふるひ　或抄　外也外様也
細　薫の居給不也無礼ふるまいをあてていう
（ろうろー

○ふるまい　乗　ふるひ給ふる心

○ふらうめいろ　孟　席下也

て対面し給ふ仏のおそれいりの
声をあまて、こわ〳〵の大きさや、
ふるまをさせて、どれほど凡
をそてくで、おそすぎごのもの
とおぼ〳〵まて、おやま
くそもいるをおろはかで
いさめてこいふて、出ざ
ねかどにぎとりかくさりて
まて也ふれものんぐ
よもゆくまさうかどて、
いづこ也ふらめいろさ
よあまりて、この辺へ小金を

○うちしく〳〵うも　孟　大君のうちへをんやうが
てさろ〳〵うろうわし〳〵し給体をめる
を薫の心よろんこう也
或抄　姫君が体を薫のおひ給心也

○さこう面　也抄　乃至扉風こう也

○大ろうの世中乃　孟　ろうとうひろのこうて
薫のアさう也

くもそかて、おぐとおぼ
やうし給うちくべもあろ
物こうろー、ぞかあいぎや
づきて、袖のおへをさ海のか
めかぎろよ入ておりひ
いろもそろかー、かでも
うまものつぶてぎろうとう
ありて、ぶつかりひて
すぐとこころをさのおまり
をろ海うもあろかー、ひ
つぶをろうまでつまろて然
ろうの世中のてでも、おらんなも

○へくくちくく 或拔 女房ちう 近くおちう 姫君の
の詞ー也
○さしもとてくるれ 盃 もてくるれちう 此中そ
るをれハーそさうねへくくの用捨そめり也

○物むつかりて 或拔 姫君の心也

○心ちあしさうくちう 細 大君の詞也

○山ちうを 細 薫の詞

○へさそるさとハ 花 薫の扇風をそーのをつり
給ふ事也 或拔 大君の詞也 へさそる物語
をもしせる列ーさと薫の度ごの詞ー さその着尾
そくくの詞也
○あくめ 細 制ー詞也 巴拔 拒 君ー心也

おつくこのさ風ぐさこうぐちう
おくくこくこひさおこうちう
はんぐちうぐの詞をき
つまでさーもてるれおい
ざくるんとこつぐあきバちう
もあのやうにどさーさぐき
つてふちうてがくりの詞
うーやもうぐるんりるー
物むつかりて或拔姫君の心也
心ちあしさうくちう細大君の詞也
おうくこのさ風ぐさこうぐちう
おくくこくこひさおこうちう
はんぐちうぐの詞をき
つまでさーもてるれおい
ざくるんとこつぐあきバちう
もあのやうにどさーさぐき
つてふちうてがくりの詞
うーやもうぐるんりるー
物むつかりて或拔姫君の心也
心ちあしさうくちう細大君の詞也
いうおるんとすちくさあう心
ちらけおうるんいまてい
くるをれどうやうこひ
ちうよぐさあてこそ物ちう
すてーいう也おあはいくこう
かそくるんとて房風をやをう
をてあまて給ふいとむくつま
うそおくづういうおくるか
ぐめちまていくこれくう
こうもれがいぐそあさとは
うくうをやいうんかづくあう
ちさうおくおくるあいさ面

○へつそめ心を 孟へつそめ心をうひうしなふく
ハうつせりきんとそて薫の詞也

○うつうつり 花 姫君のめつらしうきこえ
のほと薫れとうらめていつしかめつらしう
さしもさしもんとの也

○人ハくもと 巴投 さてありしとをくんと

○それらの 細 愚癡する也
或投 薫の世の常よりくうて鈍するとの也
○心うくさかと 細 前よ佛のは灯もうくと
といつ詞よりあり

○乃いよくおうをれてへつそめ
をきこえおがとうねばかんえ
うとてんとそでうめづらしう
いうふうこえおがするおうハ
わんかうみのはまへそちうと
もそて侍んうそれおをぢを
おそれおこころやづしこゝろえめて
侍まバ人いうくもてそうう
おのふまでうまでよみ今
これりのすてうて侍るやて
こころうくさかあろかげよ
はづのこゝれうをうた

○うつり 或投 白ひやうをうとゝよみ

○うつ心うくう 細 薫の心也

○我うて巴投 別人のうふうわハ薫のとゝよ
うていもうしゝ

○いうよくうちわく 或投 別人ようひとゝれて
くちわくんと

かうて乃おうで人のはをひ
おり給ようりやうしまとあり
かうこころをうあさゝんハさうう
はをそふおすてうん人ハさうう
どうこうあうまでうをうれ
うでうびうこうあまハ
さてやうう庵いふうかう
さゝをうまとゝさゝうこの
うこうのやとうひうへおやう
ばしおでゝみうひかうと
おりひてうさおはうこゝ
いとうゝまれうくおあでとあう

○うるはき　細　葦の心けくるる色

○くるる心乃　細　大君の心也
或抄　大君の羽

○ゆふしき神の色　河あく山のくれゆくそひ
人乃袖のいろとくいまもり
花眼者の色のいまくしきと云也

○乃くくの　或抄　我心の銚るる火へよ物うるとき詩
色しるるとき

こころゆるひしおもひもなんとふるころかきやる
るもこころのくるくて
うらへやしおくろのかづをおりひてやきそ
やのこるれなるをゆふしき神
よこづくろいふひるもふ
きくるよ雨ぐるさひ
おくくうそすふこるも
おくやうまおへるとこそ乃
かけといとうなくとび

○いとうくしを　細　葦の心也あるういふひるも
いくくる　或抄　薫の羽

○くれの色と　巴抄　眼の時分との義ハこるる

○さハるのいろ　弄眼のかとをるてるまの義ふ
めるすと　巴抄　今るめるるるめるそ
心さハまへくくり山後しるんりのをと

○ものゝれ　盃　橘姫巻ニ八宮の山留主ニ琴と
めるくるをさてらりひそろくる

○そろ〳〵こと　細　大君の心也

○名香のいと　花　いとはいつきも最の字ぬ心なり
糸よはゆ〳〵さろ也

○人ろふもよ　細　芸佛よ志の好きをいう

○もんろあろ乃　世捌　墨染の時分今さろよ心なれ
もいうことをもんろあのと心よ句とさろ不し

さ面をいろ〳〵ほくさこしらふよ
ろづ〳〵ものまろうかうと
まーうがろこころぐ〳〵ろづつま
りくまあぐらおひまろうかし
ぬおろとおかりばかこころあう
こづこさまお帳をかくけのれろ
よさーつぐそ〳〵ろうあかろ
おつろ〳〵やうぐ〳〵のいろうぐ〳〵く
まりのて志こさこのいとともあやう
ようかまろもろひよ〳〵ろうは
をふかくけをもおりひやまお
つれこころそまづつく〳〵ぐさ

ぐあのいう海さこふおろうこころ
いつもてしろやうふおうくさく〳〵
おのひろめーよたぐ〳〵ぐれぐ〳〵
ろろいこあ〳〵んかぐふこの沖
こころもさりとともすこ〳〵ハ
こおるんおぐ〳〵せあてのぐ〳〵よ
やうふー松林のおのもろひいて
らあこころぐ〳〵にをのづ〳〵おれ
おりろをまてこねのあし!
まぐこのひしもこころがそば
みちこまこさこさろつひあさ
世のれぬぐ〳〵よ〳〵ぐ〳〵ハ

○秋のらのもこひ　河　秋野

○おいん　盃一周忌もさふ恋もやうさ作ん
と芸の心とのべてい作也

○常るさ世の　哉捌　世の中ハ無常の物語るこ作
へハそれよハとさく〳〵姫君の返答し作也

○尺とゝうちうく 孟 大君の体を葦ての心也
○いさゝかゝう 或抄 上の詞を思ひてくやめやとそ
ろゝといひ〳〵くく也
○ろゝるうきとと 巴抄 くくの用捨也
○ひやの汀〳〵 孟 八官の汀〳〵よりふるれハ世ま
るう〳〵てわれハいやうるゝをうれんと大君のか
きさゝ汀心也

○水の音ゝ 或抄 るゝきゝゝハ泪也
河 邊風吹斷秋心緒瀧水流添夜淺行 後江相公
漸行人出 白氏文集

○ふひのやとれ 河 晨雞再鳴殘月沒征馬連

○ありうも 或抄 菫の心也
○ひうろてゝう 万水 ありれてひう障子也
○ところゝもよ 孟 大君と菫ゝと

○るふとハるて 細菫の羽也

人のうろおかーやまてゝおうり
もおがさろ.ひうりんこうろうのの
さゝじをゆゆてゝさこの表
かるをうわこをまんおもも
すうーのぐりあおへふかぐもも
あさありのちろさもれいがゆてのの
なもやうくひうりんこととその.
ろこよいこえんなろさ海ろちち
どもをおふとうおくてゝぐやや
うよ月をもろあをもおかじ
んよおてわろびゝあさ世のの
あろさ世をはしあろ世てるん

。やうくおもふこゝろさ　細　大君の心

。うつゝと　細　大君の詞

。夜ゐさめこゝろさ　花　早晨也

。今ゝとよいと　細　明果てハいかゝと
巴捌　姫君の心中也　或捌　今ゝとよいと又ひ
きとと云一句ハ姫君の詞也いとゝろるゝ心也

すぐさま風ほこりさといとゝろる
こゝろさ雨ーてくるひものしる
つゞやうくおもふろうさもおく
さゝてうついとうたゝかて
おくぶてくおぶやまばおくよ
うくのぶていさくみわつゞ
くるんといくおもふろの
ひとゝろうろさ雨うみ風
ちくみさこゝ雨ふさわた
ろねのをとうもひく
いとゞよふくふゞろうさをと
いとゝろるゝろうぞよおゞろ

。こゝあうゞかよ　細　董の詞
或捌　真賓の後朝めさてゝろうゝとゝ

ふてとゝろるゝろひ　或捌　世の常の文歩のとくよハ
ちくてとゝ

。あさまうう　細　大君の心

。今より後ハ　細　大君の詞　巴捌　今朝ハまう帰
ゐ以後ハ董なきうひ吟んとゝ

ことあうゞかよ勅雨ふもえふ
待まゝゞ人ふらゞをゝもろう
きゝもつゞさ例のよふおゞふ
もそるる女おてふ女おゞひ
ふろゝとゝて雨ろうなもゞ
ゝうよふるる女おてよふろう
うろうさゝろうあくゞと
おゞ女ふつゞうあゞちなろんの
なゞもゝゝゝゞゝそふて
ひるをれとて出おろんのさ
もふゝおさまゝろいるん
とそゝ雨ろはいされゞそうて

○いとゝなり　何せんとする同る也　無便よ
やるせなしと
○あるころや　細　菫の羽也
○あるころの　花　まことの暁ぬきの別ゐ道
えまよふ物ゝそありける

○山里の哥　菫也　細き茎くと、峯の山風も笹の葉も
心かるきやうといひし村鳥の立さまよき小羽風夜ぬき
朝のまゝの音　鳥もろともにあくるいとひて吹ゆく
明行空をとうあつやうといへり

○鳥の哥を哥　大君也　何古今ぞ鳥のまもき
こゝなり〳〵山乃ゆきゝ心をとゞめんと

○ゆくしらなそ　孟　大君を菫のをりてりあ
座敷へうつすを云也

○名残うつりて　花　六帖五ようとせうくろきうり
ゆう妹う袖名残うしくおりかゆうふ
○いとく　或抄　姫君の名代やふやうるまつて
ゆうしうきのまて也　菫の心也

○あるへとも　或抄　姫君のあるまのりさへ
なくてまゐるへくもうろうなる

也抄　ゆうきまをうへ菫のをり立ゆうとまぜそへ

とうやんなくつぐくまでそれをとへハ董ハまことよ
ともいふ也

○此人の 細 董也

○ひろくハ 或抄 大君ハ世よるひとゝ此ニ治よ
ありてそんともいふ也
○我ともハ孟 我ともハいふやうにてもろくゝ子
中君をへんなどよりしきと

○人のうへよ 巴抄 中君をハ我ありてんと姫君をハ
誰ありてんそと

○此人のおさな 細 是も董也大きのそろくをさすハと

○我世ハくて 河 古今 いさてよ我世ハるんもう
そやはゝそのさとのあれまくもの

○ゆくゝゝ　或歟　好色やさしきをいふ也

○あをまきさを　河内方言也　止宇ゝ此甘波加利也
止宇ゝ左加利天称田礼止毛方呂比安比介利止宇ゝ
加与利安比介利止宇ゝ　挙巻　呂催馬楽
八尺為尋　左傳註　花　是姫君のもひおこす心也
あをまきさの哥よりいろとそうさうてれくれとも
うち釣をとゝめん也　弄　あをまきさの哥を薫と
姫君とうち入うたひてをうく物うちうち有し
を中君のいふ也ゝゝ

○ゆかしくもあらず　細　故宮の正日をいふ

○ことにうとくも　細　中君の心也

○はつかしきまで　弄　あの君さつまと中君のひき
きせ給也

○ものゝ人ゝ　花　橋姫巻よりおこしうつす也

○まさるべくも　或歟　人ゝのさまをいふ
うんとおぼしてせうしさよそゝねと給也

○ぜひのことゝも　細　故宮の御ことをいふ

○ゆかしくもあらず　細　故宮の正日をいふ

○ことにうとくも　細　中君の心也

○はつかしきまで　弄　あの君さつまと中君のひき
きせ給也

○ものゝ人ゝ　花　橋姫巻よりおこしうつす也

○まさるべくも　或歟　人ゝのさまをいふ
うんとおぼしてせうしさよそゝねと給也

うるはしうて　孟　名香のかをり也
○心ことに　花　心葉と八金とをえりて花のさまをもろもろ也あをきもの心〳〵糸にてぬひやうにこしらふ
○人にたてゝ　哉換　大君返すとり給はね也
○ろくしう　孟　返事もせぬ也給はらと云也
○くとゝきと　也換　八官よりとれ給ふその後吐く也
をるまでもなんものしおのいざりをとうをくるふりをさ　哉換　さてもとや一開忌こもるうとゝ也給へとあるべくもあてるるしく也
○月よろこび　花　重服をさてもろ〳〵しく軽服とさるゝと鈍色也
○ゐくるゝと　哉換　服中八分とうけくるふるもさ也うえるめりひて除服也
○又もり給　孟　中君と大君の又給也

○人ともれと　或抄　中君と薫へと
○近うゐうして八花　近うてうゐうくありし
此中君八さをあうまりさしくありしかうくとやあんくとハちうゐうくハ有まりさと意
或抄　中君をハ云ても薫の近ゐうして八ゐくし
○おや心よ　細薫と中立とくさし大君の心ゐ也
○うの人ハ　巴抄　薫也
○袋の衣と細　八月よおくしう也九月まてハうむ心すくてと　或抄八月廿日ゐてうのへし
狂服の中也九月よハ狂服をとうのくしられまてハ待ゐゐて也河海よハ男女初會合忌正五九月云て
○ましのやうよ　或抄　先度のくくよ対面可有と

ののゆひよすうくうちてめでこまれバ人々これどおりさ海ようるひて人々なり人名ゐんよきりくともちおくりしていやゐうくぞやゐんくとうのりうまてうていゐまこゆづく人々のおくてやゐうづくそうんやうくおくの人いうこやうくうづのをも
あなゝうんあ月ゐ
こうゐおくてゐうさうまいのやうんとえ

○心あやうり　或抄　大君の心也先度のと心あやうりとゐひゐ也
○うひの外よ　孟　薫の心也
○人もいくよ　或抄　却而人も不審でとうとく
○れ文うて　弄　薫宇治うて姫君のくえ也
○今八とゐうさうて　或抄　大君の返ゐれ詞也
○例の人　孟　弁をうてうゐうゐうさ薫とうゐうくう間とうくして入なんと

わうふこうろわやうりてうづつうわわゐこバうきしとさびてそいうんてゐうぶひのほうふこうろうさ海こうろうふ人々いくふりひゐんと
ひうそうやしおて海をとそゐさそ作ーかのこうろまひよゐうくさづこゐうえやうあとわう根うびて例の人々てうづふの如ふ五こうろゐうさのゐくさうよ
このこみをおうこのくまうし

○世のたとひ 或抄 董の京へむく〳〵とれよと

人ぐるしばらひよりあひて
あつひのすゝふろうひなど
しおうんとおいてぐうろづさ
てふらひあひて〳〵ぐいまな
らんとゝゝろひわの世ろう
姫君のうまくとばうう
おうねどうろうとおいて人う
うをおあろよ〳〵うとみて
うろめてさゝろりやあん
りーあどろうも心すてやいと
あるまもろともあろう
くまぢ人のゝろめと

○むく物語 秀 昔も我心とうちとろろ
巴秋 とあるをもうるも中立〳〵
○うちとくまゝきハ 孟 さてねへうの董よ蝶
をゝんとゝろかとうちとゝれねと
巴秋 弁う心もうのゝうゝ

○此君をし 細つく恨ろく中君をさゝ
よへさと
○却うり度 巴秋 勝劣あるとと董の心うく
〳〵いかしとまゝてゆんしてハと

○なのうをと 秀 董の中君よあひとあるを
うさゝたろうへ〳〵と
○とよ出てハ 細 董の心より中君もとハうち
出ろう〳〵

○かいようんあん 細 董の領状いあうう〳〵也
そのゆへハ大君もと心さーあうろよ引へ心
とうへろくく色〳〵名をおろへさと

あゝまてこゝひとりおりて
てうゝゝあうくハ此君とそ
いぞんどうござ海るんそだ
さてもうんそめていおさつよ
なりてうまでさゝろあう
をゝまて此のうおもひ合あて八
おぐさみるんでおいでくハ
かハみてさうとをまちうん人
のあんほいようんあるあ
ひくてさ乃あうあうぐ人
人のおもりんとをあいる法
さゝろやおごつゝあるん

○をしさまつる　巴扨　中君へおくりせをてハこと

○昔のおやもひを　細　大君の中君へ申給ふ
巴扨　八官の遺言也　在世の時姫君こちみかこゑひのおもかけをとゝめ姫君ハ此まゝ山中よなれまさんと心ありそくもおくれんとおもひ

○さハりのおほ　或扨　ていれ遺言をまもり

とゝまつるへしと

○此人くの　孟　さまねくの我と心ゝきあるをいふそれなるへしと

○やうのもの　細　おもてやうの物と

○君こゝ　或扨中君をさしていふ我ハくてかん
中君こゝと

○いくよ あかを 細 中君の心也
○一ところや 八 細 中君の詞 大君てうよりて
まいりそめしところさき故宮人の詞ひをきさま
うなど
○ところ〳〵とも 孟 大君ところ八我とはるとも
ろあさましきをとしころやうよ八宮の御事
うしなど
○心かそさうくしき 或抄 上の詞なくの外の有
さまをありてしくるくさむくろと姫君の
の詞一返答也
○ゆをこれをも 細 大君の詞
○ゆひそそれ 巴抄 本心よめどもその心と中
君へしてり詞也

いくよ あかを 細 中君の心也
○一ところや 八 細 中君の詞 大君てうよりて
まいりそめしところさき故宮人の詞ひをきさま
うなど
○ところ〳〵とも 孟 大君ところ八我とはるとも
ろあさましきをとしころやうよ八宮の御事
うしなど
○心かそさうくしき 或抄 上の詞なくの外の有
さまをありてしくるくさむくろと姫君の
の詞一返答也
○ゆをこれをも 細 大君の詞
○ゆひそそれ 巴抄 本心よめどもその心と中
君へしてり詞也

まいりそめしハ 孟 薫也
○ところさき 細 兵薫をところなど
○いくよりてうもとくき 或抄 大君の心也
○ひとところ 細 父そそも母そりなど
○そそやと 或抄 宿司とも物心よりもあ物なと
○ゆをも心とも 河 いる君ともひとるまれともき
ものハゆを心とせみせこきり 伊勢

○あてきうの人　或抄　弁うやうのろうにうしろ
の人〳〵也とさうとうくとも大君の心よ不意
をもうくとおれ　あてきうの人
はらつつきもむをのごりてのん
はおりひつ　ところをやりて　あ
うつむきるうことをきこととう
もれどこのそうぐくきこと
は　今一うねころぐもれ
こととよいつまそれなる
はうごうつぐりやまあ
もいとこうこうまうて
ぐうせてきおそおぐんな
うたごともうこひやまて

○こうすれ　河　不被動

○あやしうこと　巴抄　こ姫君一人こと

○例のいろの弄　あは君のる常の色れおそき
せたまふと服衣をうきてと

○山ぎの花そ　河　世中をうしとひそもろく
よう多をいくさん山ぎの花
○もてう　河　顕證　巴抄　わかはよわをて
いろうひそろうろもるまひやうるこ薫

○さいへ　細　さいへ〳〵八年老ぬる人八達慮のある人をよさもすてゝ老ひろうろたるいふり

○年ころ　或抄　大君の詞董ゆるとの給ふ

これもいまゝで女どもびやうぶいつもこゝめもんてゝもおくりてをりてこゝろめおもろこゝろいかゝろゆるめらどいつもくゝてきんとおぼしのをこのおひんのものごゝろひてもうよきめうるごとさはつゞうゝやいとおしくこゝのゐまゐがまづこゝして弁ごまうまろよの給ふそゞろもんすろ所ろを

○のおひまろし　或抄　八宮ゆ連このろ

○ありひらよ　或抄　董のやんとのろ也

○うよ不めさて孟人くしきまるハ董よろさうんされる昔うり思ひるれそゝろんよてとハ我ハ世ろさうんハるとゝ

○此君の　細　中君也

ものこのおとうりしをきてをき.
い海こうてハろづよのうり
なくこのこゆのこてお申さまで
おとをのろをおりひしまだ
さ海なろ出ろゞのまず也.
うこゝおろこてうるをを.
ふ人ゆぞおまかりさ
ゆばろ出こゝをもるひい
そうれてもこまず.されど
もしわりひうれあろう
ろそいこうこゝをけ
のさうもおうんも出ずしぞ

○さいえ切りし 細 董ハやうよの物ぞとなり

○又ちゝ君よ 或抄 中君とハ白宮へとりもちて董のうへの人ぞとなり

○それをやうやう 或抄 白宮のやうも可然ぞとなり

○ねと不ありて 細 父宮母小方也

○さて世よありてさき 巴抄 二親ありてまいりてなどゝも如此世よありてさき董と白宮との事ハあるべしとなり

○うこもれと 或抄 をれなれとも云詞也

○さのこゝろハ 細 弁君詞

○いと哀と 細 弁君也

○ありてこと 巴抄 中君もあり君も同事となり

○ありをりもてこ 或抄 兄弟のやうに

○ものとやうよ 細 董へ此趣をとりなしてとなり

○さて世よありてさき 巴抄 二親ありてまいりてなどゝも如此世よありてさき董と白宮との事ハあるべしとなり

○うこもれと 或抄 をれなれとも云詞也

○のちのれいの心ハ也秋ことさらにもてまつるよ而後の
ちハそれとも唯今もつ可然ことを

○こゝやのかりいえ 孟 八宮のれ遺言も駒分ろ
物よハとのちそことあれ品位らくハものちと

○此ちの 孟 ひとうそも薫よあちをことハれ
しうんと八宮の御ありさまれちと

所ちさ而をうんとてまつろえ
いふおちそれさ而ちめうんとうろ
めちうろうちのことうんちうを
ほの所ことろいさうでさんみど
うほちくめでうさ本ことちみど
よことおりまもれとうんつく
おりひはちのおろみちの御ぢん
ごでしおぐめちことは
つろれどそれいさうでさんの
御女どさろおでおうちやや
御りまさんと御りていまうも
ほしこ在おうろまことは

○それ皆例の孟世よあろちひと

○ちくへことそれ孟 父母ことろてハと

○ことうこうも 或抄 此薫句宮のちハことオ
覚をてて此此ありてうこと 河海ニハ笠壽
とあり如何

乃さおうろうこうでへおしれ
なまうでひこうろうとうをを
くちんをたそまろていふ
うまうかうまくおりくのれ
ちおとほどくこうまそ
人をそれろう人ぐたさ
そぐれろも。こころのかみを
まぐきさ而よさもねだひ
こそ為くなうまこれ家
のこあるまぐでさうみる
ねうどまりてうこそよ
もほうのでまかまろう人

○さうとう雲霞と　河仙人以雲霓為裳之選
雲是誰王宅　いろ〳〵仙人のすむ也
巴拗雲霞よ交仙人のすくよやハとも

○ゑとう〳〵　細　大君の心也

○うろ〳〵　巴拗　糸をとうのく巴と拗ハ
あや君の心也　或拗一説中君の心ともいふ
よろよろ引ともあるべし

○ゑとう　弄　向ふうらうらと日の光一勘和
字の心也

○まさをとひあふさ　細　八月ゑれハ也

○ろろひのさて　弄　姉妹同處ゑれあてとも
のさて也

○いろゑれハ　細　董の刊

いろよりてゑまんと拗ハ
どゝでゝろ〳〵ゑてこゝろ
ろへおづかおのろ海こ
るさゐをまるれバおろか
おりさゐぐろへよ引ともあり
おてまぐさひあつさ拍れ
ばすろまびろてうれ
て弄のうまひつるさ海を
まろろふさもいるれバを
うーもうをおひるれ拍
んひごどろおりしおう
そでゑるさうのよりハ私

○ゐ〳〵我心よ　孟　董の我と出家の心さへあれハ
さやう〳〵大君のおもひもよらぬ我と似合ふ事と
○さうしもち　万水　こさうしくるてしもち也
○心ありてうち　或抄　弁又その外みくく也

そつるまやとおぼとよいくぐ
もぐこころつよくひてゆぐる
ぎバさうしぐちうてしゆぐそ
さうばものごるぐみも今ハ
わうまぐこころのゆぐうる
よくわるれとよひづうゆ
ものうちんおうよゆぐて
こばもとのおへだこうて
人くこづめぐこうもゆ
ぐらいおりひまゆぐひと
ゆぐうゆぐよ風のをこうく
うの打つよそうの見ゆ

○やとうろひさ　孟　董と弁う也
○ゆるすおよ　孟　大君と中君と
○うちしまうろ尺　或抄　大君也

ちこころをそゆ人のゆぐひおうゆ
ぐまこつもおうぐくりひて
やをこうちぐのさいおぐ
うろおをのうまうと
うこうおこゆぐこつの
てゐれバおうぐくもいて
きこんおをうひをもなど
うぐそんそまうちゆんと
ゆりひうよおうちもまぐて
おうひぐふこゆおうてやをる起
おおうぐくこうれおう

○るゐの心とるく　細　中君也
或抄　大君の心也

○いうよりもなをし　或抄　中君の事をいふ
ことあらくとをもふさま也

○むつきをう　或抄　むさくと奇麗ともるさ
よるひるこゝろもとめくねんじわたるを
いとらくおしくいつのまにつゞきぬるにも
ひつゞきてひとまうちまもるやうにおもひ
えらるゝまでおもふくく又おもひつゞけ
のめのうのうち。うちさまそこまでいふ歟
よ本説のこゝろを引あまそ入のをいつゝ
ふるをおしくおもひなんとおもひなり。
おやこうゐのつゝき房風をそうらうのひつゝきるよ

○ありまし　細　大君の心也中君と大君教訓
あるし時さへいふくさるゝよひめくと

○もくてくりくしさ　或抄　畢竟可然の後見を
なくてをとるおくれをとるくと也

○今ハとて　細　故宮のおもてもとるまくくと
ひおもひ出る也

○さる心ゝをう　拜　人くのうまへて姫君を独ねさ
せをうるやと思ふ也

○うろ〳〵 或抄 中君也 大君なくハまもりうる也

○わるまうをよ 巴抄 中君の如うろさ也

○もと心を 巴抄 あるその心とゝもゝて如此
ちろうさうらふと
万水中君一而ろうさうる心とうさと心しちろ
さうをうとうをろ

○又とゝ〳〵久し〳〵 或抄 中君の何心なきさうろうる
よ中君ようろ心しあれと又とゝ〳〵久〳〵大君のれ
ぬろうさうと

○うとかい 或抄 薫の本意ハ大君也

どこさあさ〳〵おもよおやうく
ざうそうとろよおるまうるぐうろ
くくらくげろくさを
まうてやろかおきま
ぎよおまねまぐひおつを
ぎふこうもさてぐうくと
こゆこべいらくおくもあう
みとくくてうきおつんん
つこのおやふこうく
わこれべうこをもうろの
ゆとえおひくるうま
それどるとかいぐんろ

○ろ〳〵つと 孟 大君の薫へうちとをおをあを
ろうてちんしろと老人とをいおと

○中君へいつころ 乖 人くのろそくくる也

○さうとも 万水 老人ともろんしろとへいおへも
何とそやうあうつと推量る也

○うちもう 巴抄 姫君の本意とへ中君もろひし
めさんよ今中君へ心をろめしと

○此一段へ 或抄 大君を恨つゝて其上ゝて宿世
あり〳〵中君ようろんとと 中君もをくとへいおと
乖 中君よ一夜あひあとと

○ふるてまつるよろこのつゝ　細董のさまをいふ
何とそゝ大君うくひのれゐそゝ

○初そゐき神そ　河紙同哥抗云人の中さゝ弥
をいのりさきさゝめそうをとゝ云荒神のる也
乖　万葉哥ももおそゝろゝき神をそゝろゝ私不審
又云女の嫁とゝる時分さゝろれの鬼魅をゝ領し
るを妨るありとゝを私一勘万葉才三大伴安麿
卿大納言哥　毛ゝろ〳〵なるゐ本よりちゝやゐ
神ゝろゝくといふるゐ本てゝよ　返一毛ゝろ〳〵花のこ
さゝをそ又るゝをへゝろゝひよゐゐ我こひゐ

○人ゝとゝをゝて　孟大君の人ゝとゝをゝゝろゝ行ゐ
とゝようやうよりそるをゝ人ゐるさゆゝよゝゝさゝ
初ゐさゐゝといふもゐる也

つゝゞゞよりてゐゐ人
もるゝおゐつゐまをふゐてなゝ
おゞさるゝよゝそゝい海をのつゝ
ゐんもゐるれゐおゐおゐりひ
きゝゝゐてんおゞゝゝひそ
とゝちゝゐてゝゐゐゝ
おゝまさるんといゐゐてれゐて
いひきおゞゝちゝいゝゝすゐ
わゐおゐゐんゝもゐんゐのさの
乖るれゞおゞゐゐくゐをゐる
ゝちゝていゞまゝゝゞく
もゐゝゞゐる海ゐゝゝきゝ

○今をのつゝ　孟ゐうゝてきんくよゐとゝを
ゐゝそゝちゝをゐんとゝ

○ゐよ人ゐゝ　河ゐゝとゝもゐりひそゝそゐ普
ゐりゐよ人ゐゝの秋れよるれい
乖本意のゐ君ゐれとゝ中君ゐ心ゐゐ
ゆゐよゐゐゝくゐをゐねとゝ　董の心

○あひ物ゐよ 或抄 菖蒲の中君よの詞也
○いと心くるしう 巴抄 あな君の心よるしの詞
なる也

○我ゐ〳〵あやし〳〵 或抄 中君よ心の引也
○つまこもき〳〵乃 或抄 大君のる也

○弁もらひて 巴抄 中君の御ゐ〳〵ゑへひきて
いつく姫君と云ひて也

○いとろ〳〵〳〵 或抄 中君の心

をゝんやうすべきわざかやとて
あひ物ども心くるしうつゝきて
つゝきん人のせさ給ふべきうひ
あよふでのち世を契りて給
ふ程、我ゐ〳〵あやし〳〵ゑのやう
おぼゆまでひ給ふ事をつまこもる
のれそゝき、今てびんそゝんの
こゝろおもひのごあつ、倒の
いでく〳〵ゐ給ふ、弁もらひて
あやし〳〵中のまいらづくあり
まゐんとらひをいとそゞく
なりひとの出こゝちふかう

○きのふのあ〳〵 細 きのふよりふるさひて
昔のれ物ひしをを世中をうき心ゐそゝき
ろゝも中〳〵人〳〵よろ〳〵しき心つよ
との詞をきゝをるく教訓ありしもやう
のる也心多くてありをろ也

○人の中れさうくも河 蟋蟀居壁月令
遶壁暗蛩無限思慰巣寒燕未能歸 良秀集
花 姫君の人れのる屏風よろれをきり
をよろ〳〵人ていつる也

○あれとも 巴抄 中君の心を姫君れいとなりきと

○ゆ〳〵しう 細 兄弟とをよ菖蒲のえ詞つる也

○今ゝう後も 孟 人〳〵の心得ようてゐうよ
ろかとよ油断ゐとと

○あるさよ 或抄 菖蒲のゐ〳〵きとう人〳〵

○さしもさのつさい 細 薫の句

○多もうをろへき 河ふねひくをたをしとゝよ
さの海よ多もうをろへき心ちこそすれ
○もとうくく 花 故宮の心よ姫君ふたりの
をさ〻ふるを心ふかくおもひやりて薫ふる
遺言有しをよく〳〵又余も捨てさと
弄落一置也婦君の中君を切〳〵をさてるを
しふ又それを薫れ心ふかくおそ一夜契りふ
みひさゆふまをもそそうと
細 花鳥故宮のかしこを可然乞但是ハ只今大君の
中君を捨をさてそひろれおふうまて猶可然
○をくしき 細 ふてさそもよ兄弟なと
けくしき節をいふをるれとも

○うさもつさき 或抄 大君のそひろれおて中
君よりふ心ふくいまをれうと恨也

○官のの 弄 白官のの也薫ふりハ好色ふれて
姫君もさそそおふとよをれよ心ひく
ふやと恨也

○いとゝとゝろよ 或抄 姫君の白官へ心とゝろ
おいなとさりふりてとゝろく我ふいろ〳〵さと

○さりはてゝも 或抄 薫の兵ひおかすせうし世之中
君も薫の心ふうさ〻とせうし也とを心人とも

のさまく也
○姫君を　巳秋萱の早くれんとを何とかありけんし姫君の心也
○をしとをろ　細中君をよそよそおもひてい
○うちわたも　或秋　老人共の心と大君の心と不合也
○さらく　河　進心サカシラコヽロ日本紀
或秋此さらくハ賢良可然也
○此文のり　弄　薫京よりあれ君のうへ也あれ君の心ハ中君のうへ後朝の文とをろく也
○秋のをくさも　花　信明集　露ハをもと我をろ宿の萩うえハくて秋をそをかなれ
○匂宮　校を哥　薫也　河古今　匂宮　校を折てをくさて本葉のうへハ西こそ秋のうへあるのされ勝臣

もいとおしくとさうあきよ
足指をもいふれにけるを何とかありけんし姫君の心也
○をしとをろ　細中君をよそよそおもひてい
○うちわたも　或秋　老人共の心と大君の心と不合也
○さらく　河　進心サカシラコヽロ日本紀
或秋此さらくハ賢良可然也
○此文のり　弄　薫京よりあれ君のうへ也あれ君の心ハ中君のうへ後朝の文とをろく也
○秋のをくさも　花　信明集　露ハをもと我をろ宿の萩うえハくて秋をそをかなれ
○匂宮　校を哥　薫也　河古今　匂宮　校を折てをくさて本葉のうへハ西こそ秋のうへあるのされ勝臣

花　同校ハ連校の心をいひてさて添をろハ
○姫君ハ心ハ色ハあまりにうつ也
細　薫ハ大君よそ心をとろかうと大君ハをり添ハ
○此校のとくとあるさまの形くとと又の文ハ
匂宮と薫とハ親昵すると連校といひいろくと
○心のしくと委ろとさとと一番の文可然也
○そこをろと　巳秋くろのさまと恨もせと大くと
○姫君のをひ添也

○さてと添くと　細　後朝の文ハ中君のうへ
添へさうとく

○うちうとく　細　大君の心也

○山姫の哥　花　姫君の活返すと也うとくとハ
薫ハ中君よそひかうとをよそくての活也
弄　哥の心ハ色ハく深くうとくをろうとくと
也姫君の心ハいろとともうとくとも薫の中君よ
あひうあ添へかとうとれをねさうとくと也

○るをえんに紳董の心也大君をいつかう
うやまひ
○汝をさして細大君常に中君をゆるし給ふ
事なり

○そのひるく敢て大君のおひうへんと
ひもすく中君よりおひうへとハ大君のおぼく
おぼすなり

○そのかの君ひ敢て恨給ふべくハ大君の
うちとけ給ふまゝ〳〵さありて中君を契り
うへんハ兵君なるの君ぞんもいと

○とゝろ〳〵巴秋八官へまいらんも世事をうし
んとするしよ御不慮のおひやかしきこ
ゆ

それをうんぬんとえんごとまで
おがもをまをてゆづり
給ふてさびしくおんこと
をひやうにおぼしてうち給ふ
ものよりひをうまていよく
つゞめのおりひうちひごとや
わんとくひてこゝろぐるしう
あいだのうんをもろもろ
しくこゝろをとゝめ
をおりひそんのこゝろはこゞ
うもうのぐうとく今ろ
くおりひこゝろをとゝめて
るべうすまゝのまおか
じおうようにこゞうぐ
んいと今ろうまし
わかさうぐあり
おりひわてぐこゝの
ろもゝさぐよこゝの
えの御こゝよりおこゝの
こゝやをもをわいかゝまで
ろひおつまぐろてと

○六条院ゝゝ細董こゝを任給ふ二条院と程
ちかき也白宮ハ内ゝも曹司のり又二条院も里
也又六条院ゝと曹司ありとえゆ

○ゝのゝあう河ゝりおこゝまゝ小舟ゝゝ
なるべくやうひゝゝ
花ゝゝゝゝやうに有へきとゝろて三宮をす
すめをりてまう中君にあくをすゝめんとゝゝゝ
きめんとゝゝゝ
舞ゝの君ゝりのこゝをゝこゝをひ
うんをゝをゝきき給也

。まさごをは 或秘 ていさうていさうもうす 囲
うう 此歌中の体也

。ゑひはうと 弄 うるあり明のてうは自宮ハ
うるあけすんとなりひしゝあひいる也
或秘 八月廿日ろ也

。ゆくすゑと 或秘 自宮の薫ハ此世ハ知ぬ也

つゆまつうあをとやもおもふ
やなりはゝそちしはひろう
まぎらてくるまり
さけとまりよおまへのあ歌
りのはよどおすゞさ花の
すゞこもまちよのうびさゞ囲
もてこんるさんてや水よ
すある月のうをまへ与ふさちろ
やうなりよびつもしくく
おれおてまそうぜよつまて
ゆろうりひのいてまるれ
りるよみてれどおゞりれて

。ゆるをしてまうひれる
き海よりはゝろひてあるて
をのがりもそてどつみてへ
まびるをうつよでものゆで
うろんなりあのてせ年の
はゞろうやこうしゆの房り
のこともものつでよおが
しおそうづよこもも
うるやこづのろはに
うるひざさをてりく
おせるんとろりやこのお道
ばまつうはものやふうづさ

。さこをなさせうん 弄 中君を自宮ととく
ゆハこれハ姫君よ治定せんと

。のうろれ 細 宇治のタ

。そこのろり 弄 階の中かとうるこのゆよハ
有へうこのろりてのゆうへ
巴秘 馬道るこうへ一夜ゆさよ端近き躰也

○あきをそれの一せ秋ことさらにあやまるこ
さうの好る餅也

○ちりひぢ　哉秋　薫也

○此ころのかとも　哉秋　白宮の話也　近月ま必
同道一致へと

○ろくりー　世秋　薫のろくろく話へ也

○女郎花哥　白宮也　花　そるとあそ何ろくん
あるこんーおおろのへまわるまりものと
女郎花知ろろのよやとりせハあやるあの
名をやこちろん　大野ハ名寄の未勘国よへう
細　大野ハ非名不廣き野と云心也薫の惜情
話へ

○ろくりー世秋　薫のろくろく話へ也

○女郎花哥　白宮也　花　そるとあそ何ろくん
あるこんーおおろのへまわるまりものと
女郎花知ろろのよやとりせハあやるあの
名をやこちろん　大野ハ名寄の未勘国よへう
細　大野ハ非名不廣き野と云心也薫の惜情
話へ

○きうねるき哥　薫也　弄　れんろくありいうへ
なりてハ見ろこと也

○ろくてやハ　哉秋をする人のやうそハ見ろこと

○あるりろくー花　哀チ　秋のようあるあきろろ
女郎あるろくろくー花も一ときき

○年ろろく　細　薫の心也

○人の話ある名　哉秋　中君の事也

○心ろろの　哉秋　ろくろをハ見ろこと
ろくろへさろーを一夜ありて可然と知話也

○ろくろる　細　中君の何ろもろろへさるを
やり近ろうとへと

○あいと句し　巴秋　薫へ中君をこひ君乃
句引めをよゝる
或秋　此一段ハ中君へ薫のいろ心ひくやう
句しくいひのゝしりしをへハとて詞よ
あるうて可見大君の心もへさまよう情ふさ
やうなることゝもゝのこさありとそ大君の心
さまとハえあらゝ

○ろくさの　細　中君と匂宮よりつゝきハあは君の
恨もあるまゝ

○心せく　花　薫のあそうひ給るとハ匂宮乃
給そ心せくやうとゆゝしとの給とゐ
くらひ待る也

○例のうらうるゝ　巴秋　匂宮好色よりうしき
とゐやうなる成て薫の下給也中君よりの思ハせ
そまろゝ

○ありてやのうん給うつゝきまいりつゝ
ろふともまるとうん
ろうふのおへてうのおへとうのこと
はさりやとまするびさめぼ
ろくこゝろんとうん給うつゝ
まろうさゝやけりへよう
行りやとておりまつゞさ
やうのこゝ給ふやるこゝも
ぬ共八月ひんのそそもき
日ろうくれぐんこれどんづひ
していづくもびてゐて

○ろくの心ともハ　細　薫の行

○つゝまろうろき　或秋　姫君も同心るき
まれハ大きのろくゝ

○あくまとゝき　弄　宇治への道ろくゝやうの
ろ

○ひんのくそ　細　時正ともいひ天正ともいひて
吉月也

○きさいの宮 再 明石中宮也
或抄 七下童の心也

○毎日ごとも 花 白宮初せ給てその時ハ
夕霧の御子ども領下の子ども中やうとりわ
ろくしてとりわけ給へれハ橋ようなる
童のちりぬる程よ宮とハやとり奉る也

○ちごども 或抄 まつ童とうまつり給へ
○又とりわ 細 宇治宮の君也

きこえ給へ 或抄 ようるるのみへうも
白宮の御心ともとりわけしうまへ給也

○きいめい 花 経営也いとうもし心也

○ろうそく 細 大君ハ中君よりて心やすと
ゆふうり 或抄 ろうそくゆふるるくらへ
つくしもち也

○御ふみ 細童の心ハ大君より外よ心もうる
きとちりぬへハ心やすく中君ハ御ふみ
心うりし 細 大君の心ちりそ童と道引
ほつうやし中君ハうめしう給へ也

○ううやうやし 細 大君へ童の下給也

。ろりこ 或秋 弄 董の初也大君ニ言
よりさうのうとこうりこいまく物うよ
あひおもふるくし

。ひうやこうり 弄 無意趣也
或秋 無意趣ニて大君への志をやまんるもい
うるれニ言ヒてこ中君へハ夜ハなをてひとひ
のやうよ通ひさふくこ
弄 董の中君のうえ思ひいんとくくよのおて
まこよハ白官をつめんとうえふる也

。ろうこうこ花 あは姫君も中君もあるう
と弄うそうる也
。さうんし 細 大君へヒ也

。れいよ 細 大君の心也
。の入ふくき 弄 中君のうえ入ふくき道すみ
さこて大君の対ろしふる也
。いこうろくさて 花 障子のうとこてさうの
あをあるる白て物すのおうや
。一とこさこ 細 董の初

。うてもいし 或秋 大君の初
。今いこうろひ 巴秋 一定董の中君へ心うろ
ちめよ一言なしく姫君へ物初めし也何ふへろ
うの対面るれへと夜もねうさこうの心中也

○さゝしのそう　弄　障子のことまるをいふや

○いとうそて　細　大君の心也

○うゝへて　弄　かの君の心よ　薫と中君のうへ入ものんとそ也　或抄　さをんとをうつすの心也

○こくし　細　中君へうつろひのそうと

○名ハをしへ　細　薫のをしへ　ほまりよ入給ふる也　花　白宮の薫ほまりをして中君のうつろひ給也　弁君もそれまでハ薫と思ひて引導ぜる也

○まさくも　弄　薫のやうよ恥入給ふれてくくのうちひくと白宮のうつろひ給也

○姫君ハうり花　姫君ハやうよとそうとハうり給ふをそ薫を夜のおもをおさまよ中君の方へうつろひ給也

○ねうしもめく　細　薫の心也

○うちくよ　也秋ねとよこうるの心とうせりさ　ね根をとねんごとをうて也

○名のうつろひ　細　薫の門

○此さくら　弄　盃　弁うかてとそ

○中そらよ 巴秋 白宮へ中君へ参り給へ 薫へ参
そらよ

○今そらよ 細 大君の心

○めもあやよ 拜 目を及そらよの心也かしら方
そもいふ詞也句そらよ略也

○くらろつよ 細 大君の詞

○今ハよそしる 細 薫の詞
巴秋 さや白宮へ中君へまいりたまふと

○やんごとなき 拜 大君の心ハ白宮よりいさゝか劣
りやんごとなく宿世うや中君うも品物とゝ

人やうそうつま ものうめんほそ
よんそよ人なもゆりめづらなる
しのおふよ今すそよそうぬ
そのめもあやよんづるおそれ
てくそうつよづそうけるゆそうのそでをそでのみ
るさいおそうふそもかへなりけらをそうおがめづる
みそれてしいんそうくおり給てよ今らみそひるそ
そうなそしてもあまりわそばづそもらよせおそ

ごとなそうそよおがーそうをずそ巴秋白宮へ中君ハまいり給
そうよそうふそうおのよおもまだふのおそうるざーいそおる
をいておーくおりひそうよそうおのあそれをそ巴秋白宮のおそ
ぬ人よおがようれこのおそうじのそうあだりいてつそも
おそよおぞくそそりなおそうんそ巴秋白宮へ中君へ我
うひおそうんそ巴秋白宮のおそうも

○もろくとさうひ 花 白宮のおそ也

○いそんさうく　或抄　大君の心也

○こゝろくんと　弄　薫をよくうつてのちんと

○このおち　細　大君の羽

○いうともく　或抄　目ユてらるゝれ思案分別
ゝと不及ゝと　巴抄　目ゆ不見さうれい
定さうゝとさうれといふりく定ゝる物とい
ゆくれゝとむつゝきてゝるとい也　有ゝの治定
しゝろう外ハさゝるとも
○ちうの間のこ　弄　後撰　ゆゝさゝとうゝ消ろ
ゝるゝさハさ　目のまよりうゝるゝ

まさゝうく　もゝのこゝろてゝおる
うんとふおがゝるんやとそゞさしじ
をもりやずうづさゝくられ
ばいとんゝるおくゝろづゝさゝれ
ど、ゝゝんとりひゝづゝて
このおゝみすもとゝゝ今
ハめゝもひとゝおとゝのゝも
しゝゝもりひたゞ也ゞ也
洲のゝきうゝゞるゝゝてゝ
うんゞはいかゞてゝおれゞと
文のおゝまゝ也ゝたの
世のゝうひ出ゝんゝゝ

○とゝろゝんん　或抄　薫のやう此心ゝゝと
何とて推量をハせんゝとゝゝろゝんの心ゝ

ゝろのつゝゝとゝ　或抄　あゝろゝやうゞ安くの
迷惑をハさせんゝとゝ

○ありのつゝまりて　巴抄　ありのとわりて也

○ゆゝ行ゝ　或抄　とゝおゝる神とゆゝ行ゝと

○さもろこし　細　萱の心也

○わろ君　孟　ひひとさして也萱の大君と称しての詞
○心よろこぶ　巴按　心よろこぶみゆく舞うてうたうてうたうと

○ひさしき世より、或按　うとうと世をとそそんの心あるかをうく大君よりこれまつ世て冒るをれハ世よあとそんとも

○もろこし入て　孟　大君也

○うとうとろ　孟　それを哭うとうとと萱の詞也

○ゆめゆめく　或按　努く心やゆるしとと

○山とりの心ち　花　六帖雲のかよとを山とりのそらもあらしとさをハるひけるかるハとも山とりのあをあをそこひひつるか
乗山鳥ハひとりくねるとも
○例のゆゆし　細　とりあつめるおもひをうみとりるの時ハ心也さて例のとうをうのいとさるて　細　白官の雲也萱のそハるとも

○ろうそく　孟　我ハろうそくとせり男とて我ハろうそくとうとうと的暗の道ハをとくる

今もそれおのをいとおのれを
おりのそ、ろうのをもうひとをぐ
さあるそれおーなんゆるくも
えてみもまるまずいとぐ
さ水のろうのあもさあて
乃あるふ鳥のこちーあ
ろ例のあをゆくをうひよ鐘
のろをるでやすめづくなくて
あるべくろくもるとんん
やまくこうばうおのをおやや
しもうべろう
ろべせ一我やろうてまぐ

さとをいふ　花　拾遺　ゆくすゑの道ゝて我ゆきて
ひろひおけ　心のゆくまゝに

くさ〳〵　哥　大君也　花　古今　人やりの道ゝて
ゆきゝ　哥也　弄中君のくさ〳〵　源氏
くさ〳〵　細物也　ひゐ　皆董の心ゝ
のこゝろをもさやうの事をもいふべし

○いとこゝろ〳〵　巴欤　障子のへぐ也　董の羽

○よろづつよ　恨て　巴欤　うたて　董也

○よその人のこゝろ　花　是ゝ　白宮のゝ也

○いとやりくち　巴欤　白宮の心をいふ
ゆるゝ心ゝ体也

○ねひとゝも　或欤　并ゝ　白宮の心をいふ
ゆくへし　董のくゝひ不審ゝ　ゆくへも董のわりくひ
ゆくへもしらぬ心也

○そこらのかゝと　細　白宮の心也

○夜をやへてとも　河　若草のこゝろ
そこらてとをやへてとも

ゆきゝ哥を　哥をやへてとも
ひものやこゝろおもひおこせ
ゆくすゑのかぎりなきこゝろ

○ふうこれ車　細　六条院の庵也

○ところ〳〵　細　童司　白宮（匡房の奉公うと之

○ろく人の吾　董の白宮とハろくひきかり〳〵我なり
君ともちさうなくハおくまいさと〳〵白宮と
くともろく人也

○法文　或抄　中君（後朝の文といふさきちり也

○まなくまの物引　孟　大君のもてまさと与て中君の
月とし天あくせ也

つきあらうかゆる風を吹まよ
ひ給ふ事のさ海て
ろ〳〵いつ給にふかうひ給
てとろ〳〵あるの文仕のかとろ
さとるんやりひ給のとろ
給ふろ〳〵のおこ海さとびと
ねとろて、うとこもやしふ子
やいつとかとろ給
山里のかくれもうのち
しらずおぼれ給て海ぐ
よおがく海へもをいろもも
出ぬ給ぐりくまくうとま

うつくしきものさをばかき給
てめもんあの巴なりろぶおろ
ざるもの海ともさつくこんわさ
らわ給ぐでとろもとろぐる
うやりひなし給ぐでもいて給
してまろで、おろくさ久なん
ど、おぐーりもろやそなり
んのおろすもだおやさざるか
とうひわろかでもいそて
こ巴なろ給ぐでさふおやあぐろ
給ろびいとものまくなろあとれ
つらひそびきう

○ろ〳〵さうし　或抄　大君ハそんもろ給ハなる也され
ともそのところともさそやうえのおくみ也大君ハ忌

○ろ〳〵ろ〳〵人　細　あは君也

○あやーさうき　孟　さうなくろ〳〵の心也

○ふ文と引ときて　或抄　大君の引ときて中君へ
入ぐ給也

○世の常の哥　白宮也　細　そもそも道とをうへうとさうするそと〉

○夫うこつをて　細　大君の心さきくうとさうするのやうそれ文とをくと今八卅まそそそれ故てハとうしろあてき心のそいきろと〉

○それさうへくうて　細　さきくへ大君のとろうて返すのほこうもあうし也

○いそくせろて　孟　中君へ後朝る丸ハとそ大君のいきんてうせ故也

○三そもそもの　河　中倍ある袴也

弄　河云いやうる袴ろや一巻うありてあうて中へへうをいへ也

○ろうをと　或抄　小使の引出物を斟酌しる也

○ろうおせて　花　袋とくそもそも也

○とそそそうへうて万水　とそうへうよりもそしと巻ひろ引出物のそれをとうへの老人ともれきと心よあとそる也

○さうろうし　或抄　うこそその心也

○そのらを　細　文なり故也

○そのうへ　孟　董のる也

○こうおかを　細　董とさそひ故へとさうとアる故へハ也

○いうへハせん　細　宇治の宮也そこもち故つる也

巴抄　あの君の心也　董へ中君をとそて云白宮へ

よのつねのようひやすんそ云ふ深きろのさてつるてきうの書なき故へてすみづさかごのこときうるうへうへうもおりさようをて只名しハおそうおばこと。うろあてきもおもうて、我さうへうてなんもいて乳それバまあやふあるづさまを。いうへくせあてうへもそうおたいをしもものおそおごうへうひみこへごくのそう面づてあそおそ彼らうぶふられバつまもて

なうへうんをそうせおとくちそさひうもあず例年きろうへうへうろいあうて。てきうるうへうへうとさうするのおもうの老人ともれきうへうをとうへうへうとさうするのおもうの老人ともれきうへうをとうへうへうとさうするのおもうの老人ともれきうへうをと

な意こあるとそうとて又そろそうとて八とく

○いそきもて〳〵 或秘 白宮宇治へ出也

○うれ〳〵さまき 細 こゝろひいりうこひおもふ大君の心

○さうし又八 孟 中君也

○さう〳〵も 細 あ〻君也

○世中よ久〳〵 細 あ〻君の祖也

○こゝゆゑと 孟 中君のうへを大君のおもふ

そろうおやなとおりひそうおて。
はせうこひおどうちあるあすん
のさ海おれどさろうこおおし
くかてまちやしおそう。
ろうあの御事をいそぎおて
まこうろうもうまてさそぎ
るそうつはあやしさそうじと
八我ともあみそてろうそき
ちりおもおこさおその神むく
あるれいさうこもうちあさて。
世中よろしくうとほしおねば
じ的言のあ〻見よもじれとを

○叫くくと 孟 弁うろる也

○ろ〳〵〳〵も 細 大君の心ひとろ也

○うてのそや八 或秘 中君とうてハをきなし
可然るもあ〳〵ハとおひ〳〵と叫て今とハ思ハ
さうしと

○ろ〳〵さろうと 或秘 ろうのるてこと

○のれこさ 孟 そせうてそあ〳〵めと

のこるんろうろうこうまお
よ此人でもうくらさ海のと
とさおくこさまでいひろうす
めまじほてろんでもおなう
ともよのとろうをもおてん。
ちろくまてもあんひろ
をそてうてのそやんをたく
まるんとおひなるやうもあり
〳〵とうでる海くさひものて。
ちづ〳〵さてでもよさじねて
づらおさうおやひ仏ざし
おうもやぜお人のてうのれ

○ふつさうし 細 我多ふつかりつゝさはその程ん
ふてしをさ淀へとと
○淀乃りて 弄 中君の心つあは君とう〳〵天の
さるをと淀とといつて
或抄 一説とうるさりのと恨ふ罪ふうるとと

○さとうよう〳〵 或抄 中君の心

○へまつ〳〵 或抄 白宮の心さうもすへとと

○さう心もう〳〵 巴抄 白宮の出ふんとも
めりさくわ淀し時いふとうう中君のりしとと
いとんやうひとと

○ふくやとく 巴抄 白宮の心中也

○哀とと 細 中君ふうるとと乃淀ととと

○のひたつと 細 公東のくる也
巴抄 此あり草子地ト可見也

ぐとと中あるりくんぐととうる
しをれととゝ〳〵ぶかくさみ
るんよおつぐりしと淀をもなと
んとゝ〳〵とあぶかいとそづと
のづえとはぐをふでつるひ
つはんふぐいつもし抄の
どさすぶふとあぶのあつぐ
をふうるあくわ当てとも
ぶぐをふてぐをんとうふんん
ぐうゝとととのてぐあつふは
もともんがいとぐとをよとうづよ
りひあ抄てぶうとうよあ
わとれふつしをうひぶるて
るぐあおつうしをまつてまて
ようつるふとひ抄つふはとろ
さゝもまとうかゝやすくうひ
抄つぐんとのとうひさも
いゝきまでおぶて〳〵とうげよ
とうひたのあて〳〵おとねも
いつおとをおりひとふぶぶひ
もとどうづあのゑあまおお
ようつのんをとうぐあせとと
あぐとうひつ〳〵のてどまをも
るれ抄つるとうのてうづさ

もおろそかにもおもふべからずやあらん。
あるよわざわざのゆふべにこれをまねく
べきひつようはあるべからねばいかよ
とをくおぼしてるべきひにはあらず
こちらよりおひあわせ度のつ
もりにてまづ〳〵くるにても無之
まじおやう畢竟びんぼうにんう
ちとぶるまいつくまでもひ
いでんとおもふこころざしハ
とのまへもでらうくぞんじ
まつるのみひいきまうし給へ。
三日よめつ 或秋 三ケの夜餅也

○さう八卅君 乗 中君のらうくしき也

○ひとをも 或秋 白宮のことを中君の心也

○家よめうめ 細 此字治の宮よ也
或秋 已下中君のことをいへり

○なまくしく 細 大君のなまくしき也

○この人心 細 まへにハさう八卅君〳〵といひて中君とわかつこころよハこの人心ゆへいひて大君をかねつる也

○中納言よのとり 孟 董也

○ふくまらんと 或秋 董の文仁羽也

○人やつくのらるも 細 奉公の分也

或秋 大君の心せくのいふまうせる也

○ふうひはさうやく 何 雑役

○をひつき 弄 ちゝーするもせと上ひとゝく書しるす文也

○えそひつ 花 ゐ衣擔懸子也 巴枝 ゐてろも箱重ゝま入て也

○えやのゐくさま 弄 女三宮のゐくさまありし色くとなり移ー也

ひげのよさそうでいとおかしげなえうのわろ給ぐうけるやうなんどでかうもあやかでさよはいもろこしてぼてうこおがさ二ぐうぐいとさうろおかしうそのほうの物よこぐいのことあれど

さの衣さてもおかさといひともこぐとうりいやどしもあしこおぐはおかしなりるこゆうびするさいとをうぐうしいぐぐんあてぼろこもいぐぐのこんとおぐいぐ物語

○てるさま 細 てるもわろくとするる也

○ゐまろうとありーき 弄 二ろうとあろハ姉妹のよろこありもろるや

○こういの蔵 古めかしきと哥をとるわろ

○さう衣哥 薫也 細 花鳥ゝハ中君のすく有ちうれゝと大君のくをとるわそあろひめといろ笑そろろへし

○ゐーー 巴枝 ゐぐとゝ出もうれゝ方間のうゝ給ろーとの心也

○こるくるさ 細 兄弟ゐろ〳〵薫の乙給ふる也

○こをろ　れよきり　弄　引出物　すこあくをもいは
さやうにてうくさうをついつをれをろや
又使の心つひーをろ也
○るてそるさ哥　大君也　細　心へてそるくとも
るれー神といひてとと

○ありをろまと　弄　あは君のありかたくれをろ
ありかまそ此哥のうちとくろと薫のかた跡て
妻よりの跡也　是もさまのうてそるるろるさ
哥のさるるとくく心をつをんさあよ紫式部ら
ときさる也
○かやはその夜　弄　三ケの夜めるも也
○中宮るとく　細　明石中宮白宮を教訓也

ほとろくこをひろれをろおやきーもくとのくてそろるる
又使の心つひーをろ也
○るてそるさ哥　大君也　細　心へてそるくとも
るれー神といひてとと

○ありをろまと　弄　あは君のありかたくれをろ
ありかまそ此哥のうちとくろと薫のかた跡て
妻よりの跡也　是もさまのうてそるるろるさ
哥のさるるとくく心をつをんさあよ紫式部ら
ときさる也
○かやはその夜　弄　三ケの夜めるも也
○中宮るとく　細　明石中宮白宮を教訓也

ほとろくこをひろれをろおやきーもくとのくてそろるる
又使の心つひーをろ也
○るてそるさ哥　大君也　細　心へてそるくとも
るれー神といひてとと

○ありをろまと　弄　あは君のありかたくれをろ
ありかまそ此哥のうちとくろと薫のかた跡て
妻よりの跡也　是もさまのうてそるるろるさ
哥のさるるとくく心をつをんさあよ紫式部ら
ときさる也
○かやはその夜　弄　三ケの夜めるも也
○中宮るとく　細　明石中宮白宮を教訓也

○そるよるも　細　一切のる也　我このむ不をとそそろ
ハありきるとく　母の仰詞そ可然くのろろよ
好色もこるれる也
○うくと　細　主上也

○いつもとき 巴扱 白官の詞也

○よくゆきてさと 細 薫の心ヨ白官のおもひを
恋のかなしきをうたへてよめる也
○月ごろへて 細 月比へて来ありてとよ 薫の詞

○こいくんぞの 細 女房のさつひ不甚堂盤不と云也
○人ぐれと 巴扱 人ヨ不知白官へ我宮つくヨ中宮の
薫のころきとけんとうちあくるしきと落也

そいでずさいでくくく
なりあるをそろもこぶれて
うんとうげうげおぐしう
くいぬるんとをもんもんとぬぐ
して良ろうてくまうをを
をそうひさづきもおうでおぎ
まてあるんいでくうう
こうやぬぐやもんぬう
ぐいくんぞろのこうそひ面
ろうまいんこもずうづうき
まやづんのまうまあるさうん
ぐうやおんうんのうぬぐひ

○不甚きさ方の 細 身のありくしきと云ろうひ
好ヨ也
○いとうまろ 巴扱 白官の不甚きとをいとうまろ
ヨ云也
○いとなう 細 薫の心
○ありかさくれ 巴扱 とそもひさいくき
おうまうハこうひ宇治へ出おんとよ 薫の詞
○こうひのつこ 巴扱 うヨ白官の代官ヨ薫の
祭候わんとよ

○こうさの山よ 河 山城の木幡の里ヨ馬いあれと君
とヨへいうらうそゆく 花 薫のうまへれい

おうろとおうでいとうまろ
くぐぬぐのおやおぐくんの
うろるくまるぐーせおうぐめ
あうぐろうのうろいるぐーよ
うつうんずぐうろうせき
月のぬぐこれ出くるうぐれ
とそおうとよいうくきこぶ
うういまおーうんのうぬぐめて
おおぐーおうぐもこのうそいるぬ
るれ。うひのつまいうろはしさせ
て。ぬをもいうぐくまるうぬん
う。ろうこのむまるいうぐおく。

…これ馬そ出させよ〳〵と…心也
弄馬そそうぶくんいうけんきょ…也馬
も不可然をとゝめしるし掉也常…の云詞ぬ
とうゝねすあり此詞有與

○これ馬そ　世栞　これ車そとゝ…〳〵とてそれ書
て文ゆきこれ馬そそと〳〵
○これもよい中〳〵　細　薫の詞

○此君ハ　弄　薫のる也

○中宮のれうさま　細　明石中宮也

○又やハ出給ひ　或栞　中宮のこれ詞也匂宮のる也

○うへさうして　或栞　匂宮〳〵中宮のこれ異見なり
と主上のおぼせる〳〵

○めのと宮より　細　明石中宮いまさうく…〳〵
或栞　以下薫の心
○大又やハ　弄　明石中宮也

○うそうそとも　細　廿一宮のれうう所へさうびに
〳〵

○まうや…　世栞　中宮と薫のれ兄弟也

○心ときのそれ　或栞　おもまきまきとも〳〵
んこゝろなしとみおりと〳〵

○それ〳〵は 細 薫の我實法ろさ人宇治よい心のとゝろ〳〵

○さう〳〵なうさう 或抜 中宮の女房達也

○とさうは 細 中宮のかうさうさう〳〵なる女房達也
薫よろさとゝろ〳〵もある也
○大ろさうろ〳〵を 細 中宮のかうさうの人〳〵よりて
ろうろうろ中ろも下の心かけをさうろも有と〳〵

しさうろうのたゞひやうぶ毎
あべうろれゞにをうごさ
ろあのうあうういえさそりひ
こねとやりひあたうまゞ毎
うゞうの女房のうちうち毎
いづまとおくろびうろあ
すくうゞくまあ〳〵こはうも
あてよとゞれて次ぎうわま
どゞさうふ〳〵こゞれろゞのん
まていとさゞよあてかた
つゞてとさよんこさうゞふ〳〵
もあうおうこもろゞぶりて

○心〳〵ろ 花 世の人乃心〳〵よりきれいとも
はかしうさいろのもと

○さうはよろさ 或抜 人の心〳〵うよりそも
世上のあり様と観念しる也

○と〳〵をさ 或抜 白宮を世上よいあう人と
いつさもさもろさとう人よ薫の所ろ也
細こうひいはう〳〵やくりやとひれてれとうて
のろ也

。いろ〳〵 盃 皆ひ絶てありつゝよ勾宮の御坐
るれ也
。さゝ〳〵 或抄 中君也

。さゝらとゝそ 細 中君也

。さゝかり 細 匂宮の四目ゝ可然也とあり

おもふらんかし心ぼそのおいんどもハ
ゆてうちつゝさゝぬるよりもうきこと
ありきよ宮よりひかりの事をよろこ

。いも君乃 或抄 大君と董よあるをやうく也

。さゝらひさゝ 或抄 老人の物よろこつゝさ也と
ほめて つよやう也
。さゝらさゝら 細 さゝやかつゝよ女房さら也
或抄 以下大君の心也
。花の色〳〵 花 さゝの色〳〵と云也
巴抄 董よりの衣裳花深也

おもふよ雨中ちかくありて
まことに風のさそひまでも
ありくさゝやかにて匂ひ
ふかゝらんこそ
。さゝらとゝそ 細 中君也

。さゝかり 細 匂宮の四目ゝ可然也とあり

おもふらんかし心ぼそのおいんどもハ
ゆてうちつゝさゝぬるよりもうきこと
ありきよ宮よりひかりの事をよろこ

。いも君乃 或抄 大君と董よあるをやうく也

。さゝらひさゝ 或抄 老人の物よろこつゝさ也と
ほめて つよやう也
。さゝらさゝら 細 さゝやかつゝよ女房さら也
或抄 以下大君の心也
。花の色〳〵 花 さゝの色〳〵と云也
巴抄 董よりの衣裳花深也

。まれ可と 細 我もくく我宮ハ習ふものを也
大君の心類る
。うしろて 或抄 年ふるものゝうしろつき
。いろ〳〵ろ 或抄 假粧をする也

。るをと 河 直也

心のす 或抄 我ハいるよ顕負せるん

。ろ〳〵をるん 孟 董ろ〳〵〳〵大君の心也

。わろをろ 或抄 白宮の心也

。大ろかのをと 細 明石中宮の教訓
ろ〳〵ろ也

ろひろをごごものをいるれ
しろもろをと人をろて此君
ものまりくをろのあろ方
ごろごをれいやをくよ
ろのをのごをこの人
をしろまいとやおるろ
ろでいをどろよごみを
引みていろごろろみろ
をくくてすろまろ我
角をいやごいとあをごで
ろいろすめもをるをれ
おびあろいごろのろやあん
とろろろ〳〵ろごしてう
ろろ・ろごをしてろ表
ろろをろあても世中をおりひ
つをろをあろごろろろ
いを面のををおびめごよ
ろをろろやをろまびとと
ろをてていともつごりて
おびおけろろ人のやろ

心のかぎりや也秋　白宮の心をくみ給ふ
ぬるんうらさまでうかれ遠くハまつる
るべしと

○さるべきさまにて　或秋　二条院へまゐり給ふと
ころまゐるべく　細中君の心もとなく結ぼほれ有へき
さまなどのかたハ白宮の色ごのみ心そのほ
どやうやうなる也

○ところ〳〵の盃　宇治の境地のありさま也

○あらの自波　河　世中をうきものとおもひしりぬる
ここちして毎のあらし波
○色ごのみ心　或秋　好色人の心ハうつりやすき
ものなれハ景気うと心をとめてとゞめ
給ハぬ也

○こゝろのかぎり　或秋　此ほかの字不審也中君の心を
地よりいひて心得へきさまや又我身ありさまを

さ海ぐとうちまどろみたるほどに
まぐ〳〵ぶねとぶるうち
とおぼすかゆあるもとうち
るんみぐまでもまうで海ぐ
をこゝろのかぎやいぐどころ
ぐびて。ひこぐれ給ふんぐごろ
ぐるまをもてるんで
まうでつんまぐひあうぐべき
さ海ぐもちくるまなど
といとうくやしき給ぐでこゝろな
まぐおぼすらんにをかしけ
ところのかぐでまうでんあと
をもて給ぐ。ひとかぎりのさま
ぐ海ぐ物のぐうぐてるんを
けうの。ものゝうふつまぐて
あを給ぐ。ひとかぎりのさま
ぐ海ぐところ〳〵のあちれ物ぐうぐて
ぐいの学つむ毎のすゝふ行
ふ松の白浪めるれずもあり
すまのさまなるおぐいろあるは
うちうるいおぐしくぐびかさる。
心のひとやしくぐあるよ女
ぐのかぐちのまかよろぐど

○ろくさうくさん　弄　明石中宮腹の一品宮
のる也

○おりいる　細　后腹なるのろすやと
○こまやろろ　或拗　中君のる也

○ろろろの花　帝王系圖云孝徳天皇二年
道登法師始造宇治橋　今案　道昭和尚同人乎

○いそ年と　花　ちとや　此ろ宇治のそりろ
ととろあれとハ当年の一ありハ

○いとろろと　孟　名うの石なと白宮の
と中君のろろろ也

○ろろろの　盃　白宮のる也

○ろひろ　ろし　或拗　中君の心也　白宮ろろ
ろんとハろひろととろろ　董ろろ
心やろろと董ハめるれろととろろ
ろろろろ白宮心のろろ也

○ろろハ　細　董也
○ろろろ　巴拗　董ハめる君へ心ひろ也

○ろそろろひ　細　白宮のる也

ろととこの世ろ海のろろりあろろ
ろろくまろろめてこの世のろ
ずちろろろのめやろえ給へいやよ
らろろりてろいおりひあろ　ゆく
ろのめれらろ中納言のろろ
さろろてくおぼし給ふまいろ
ろととろてぃとろくすろろ
ろととのろえおろろろひる
しよろろかやろろいまして
ろよろくろろみてろうろ
給ふてろつまくおぼしと
ろろろ給ろんいろろれん

○人くいて　或抄　白宮のれ供れ人くいれうりとうら句ちる也

○心うり外　或抄　巳後さまあんも心うそさすとと

○中ごこん哥　白宮也　花　ととうそ男をうら格の中絶て人とうらみ年ろ人とさろ　さしうろ表りうさこころひもや我ともろうんうらのう姫　細　心うり外のうれをいろ也

○こてすの哥　中君也　巴抄　白宮のこてすし有と中君のしのうやとと　二白面白哥とと

とありひるろもすまもこぐうたてとありひるさおんぐいくことはづうりのうりもあきバ京日おいまさんをでいれうぬかでうとといこころわいくしをそてこころりうあんま更をうんとくのおよ

中絶心抱ろふいう姫のうくく神や雨中あうさんおぐてのろうつりやとひお

絶すの我たのこやを活稿のうるをさ中絶にうべく。

○これろは心る　弄　白宮と中君の心れをえようとさもこころと云也　さもあろくうもめくれるれハ也

細　草ま地

○をさそのの　細　さのんをとハ夜ねうてうし

○今一さく　或抄　親王るれハ也

○こととはハ　孟　詞ま出ねと名残ねりさと中君の歎也

こんらうそう〳〵 或抄 白宮の心也中君のる心ろう説也

○あら日てう 細 毎月也

○をろ〳〵よかめ 或抄 大君の心也

○ろくと〳〵 細 大君のろ説也やうにて夜ふけまろつてさ世をろうてこそ中君をもこやとくあそせなこれとも也

○ろよもろうて 或抄 我身の上ろうたなあんいとこ〳〵ふおごてやるものぞらすごこそろうろうつう御こまをもぼもありてこも御る面かくく面ありこそ〳〵世のやうこと毎びてこそをおなでよえたやすくもまぎれ給らなおいろいあら白でよ。

あまこそろうをも世話をろうよかあこぬよやとおひおごろ。おごつること思ずのつるを。いこころばらてよみでとうおを為よまろうてくろ〳〵

八中君のる心そうろう説也

○いとこ此君の 或抄 中君也

○ろろ〳〵ふ 或抄 大君八世ふるひうこと

○待とこう 或抄 宇治に白宮を待とこうひろんとろひやうろく

○我あやまち 或抄 董の中こうろ〳〵給へき八也

○こそしおこそろう 孟 何とうこ白宮のれきを董のろれもうろう躰もること

○をしかうて 細 切り妙をしかうる也
○妙の山さと 河いその名妙の山里いるる
をちの里人ともえ〳〵 初え妙の山里いうと
住人さへやそめるとも
花 布留の山里八大和国也上ヨ叶ぬりさてとれ
八初叶ぬ妙の山里の哥と守治の里人といひ
妙る也此物語のつゝり多〳〵叶とそめるる也
○倒のひろ車そ 孟 白宮と董〳〵

○おいてうろ 或秋 道とろ〳〵のやうさをうかゝ
守治いさゝとしろひ居也

のやどるれば野心のくさもも
おりひやうるく〳〵よ叶ぬあるさて
うさらう〳〵 宮のもりをおろろ
しもかうく言えいとゞ〳〵づ
そろおくおぐめおていうも女ん
とはそろひとろをひでろう
おやおて〳〵うりて多うおでうる
のやまいるんとおどろうはな
えおいてうもうとおぐ〳〵ろ
ともかいぐるひおつて倒のひ
とろは車そおろすふ人おま
まろうまりてあぐめおろんかの用
いとぐそつつまおろのかも
とぐのとのそろぐるをを
そろひやすおそうをかぜの
いとぐくそろおるまるまる
そのやうふまそくそて秋呆
ろうくさのとぐ記おうちさろう
めまおつうるひともいよの和
よにどえんとて却つまおつをを
ぬぐ月でよいぐそろまでひ
もせさん出づりれ却つぐやさ
つるあろうおくるこさろつおよ
しりつろひおぐすふろう

○しつ此とこの 或秋 白宮の董ろうろひ居とやう
ヨ待とをるんも心ろうさを表へむんうとやう
のろうるへし

○秋ろろ 細 九月方也暮秋の月なれ八也

○ろつつおさ或秋 此間無音とろ〳〵ろ

ゝとろ〳〵ゝ　巴欤　甘房遽の娘之めいるゝようひ
ようなる也

○さう〳〵ゝ　孟　大君の白宮れあそこへとうれ〳〵
そひろよ董のそひろへゝなるまろ〳〵りさとゝ

○もう〳〵ゝハ　細　董のやうろ〳〵ゝハまれるろゝ
孟　白宮の躰を大君のゝて董ハやうふさ
とゝ欤也　白宮と董ととんろ〳〵ゝろてのる也

○まろゝとのゝ　巴欤　内者ゆさてさよろ船ゆる也

○う〳〵ゝゝを　細　大君の心也

○ゝゝれろゝても　或欤　ゝゝれろさまてそ
こひゝきの高心也　董の心ゝてのゝや　羽

○人のゝゝても　細　中君ゝ白宮の能くるとゝ
ゆるゝとゝ大君の心也

きろろゝをろろよつまそれ
いゝゝふつゞさゝなりて　このゝ
ゝみハあるゞゞよろやす
ゝてゝゝゝゞまろゝ
とのゝりゝのろゝよゞ
ゝあろゝまゞいゝゝゝ
まろゝゝゝゝゝゝ
おゝてゞゝまたいんゝゝ
たゝゞまゝもろゝ
のゝやゝいゞゝゝゝ
やゝゝろゝゝゝゝ
人のゝゝもゝをいゞく

○ひさまづくといそう 孟秋 一むさえいそうち
くへさそうくまーさと
○哀しと思ふ人 細 ううてあれハ哀ふ
へきなり也 夫婦の中うもにくさ故よるわる
とも世の心りうの殊勝のる也

○宮のれあり故 弄 姫君の董よくひ給也 さるあつハ
董のかのうに白宮れ好色うまりきうをうく人給されハ
うとおもひくの給へハいとおしくて姫君の心也
或秋 白宮中君へ心さしの浅深を大君へ董のよひ給へハ
白宮の志深きやうにかのうに大君の春給へ董も内く
白宮れ色わりさと心りとうく思ひよされいうと思
ふてやよ大君のかのわり給へハいとおしくて白宮のれ
ぬしをとりこめ心ふかき故也

○ふるとうく物思ひ 已秋 中君と白宮とのうをと
ろえ給ふ事のうれしうめでたき 恨服よりひくうる
心もこうる也 大君の句也

○へうて 或秋 大君の躰を董のうひ給也

○んのとうろへ 孟 董也

○さへいへと 或秋 上の句よりうれよくても有
るうくてのえやといふへく恨給ふ句よりて

心得べし

○うつしやうそ　細き人のやうなあしきそ

○常よりも　河　夢そそよ人のとハそしあく、我あるをよろこふまれい細此ろハこの外よあろへくろそ此句字治十帖の内宇一の句とそ　大君句

○うとましとそ　細川ん一もそんもさまろうそ

○いろろよろそ　巴秋　いろろよろ人さまろよろろきハいろろ我心そそ　行末あそそそそ心をうてせ

○くるしき心よ　或秋　董の心也

○例のそを山鳥　河雲のあろそを山鳥のろろよもあろそそきろハこひつそそ

或秋　まてそも山鳥の心ちしてとい〈きハ例のそ

○宮ハまさ弄　董の独句を白宮のろ句よねそ

○中納言の　或秋　白宮中君よのろ也

○女君あやしく　或秋　大君のうちうをおもふあまやしくろろ也

○ろろしさよ　巴秋　白宮ハ心ろうろうさろをろ色さ物ろひよあやしく

○心のうちを　巴秋　白宮の心中を女さよハ大ろさろうろそ心もしくろさそ

○をう心つろよ　或秋　草子地

○京うも　孟　京うてハろくよをさそうんと白宮の思案一ろ也

○六の君　巴秋　白宮〳〵と夕霧のおもひめぐらさる

○うちとけてう　或秋　六君のうへを白宮の承引なさるゝを四門へ夕霧のよろこばるゝなり

○ありてよ　細　大ぐさのおもかげを人〳〵八中宮の御方よりあつめさせたまふをそのつゞきにいとくおぼえありていづれをもへだてなくおぼしめしたるなり

○世中うつりて　花　春宮の位よりさがて後この白宮をも位よりつきをなさんとおぼしめしたるを八中君と后がねとに白宮のおもひめぐらさる

○ふるうきもの　或秋　白宮の心也

○さるべきさま　細　董八大君をとりてんとのおぼしめしたる也

○くいと　巴秋　ふるうき物ゝやとうとゝ思ひ給ふるひとをも白宮のうへを董の心也

○ありしおりおもひのほかにくちおしかりしを　細　董八大君をとりてんとおぼしめしたるをおもひのほかにくちおしかりしと也

○やすからぬ　細　董八大君をとりてんとおぼしめしたるをやすからぬ事におぼしめしたる也

○やうかはりたるおもかげ　細　董八大君をとりてんとおぼしめしたるをやうかはりたるおもかげと也

○ふるうきもの　或秋　白宮の心也

○さるべきさま　細　董八大君をとりてんとのおぼしめしたる也

○くいと　巴秋　ふるうき物ゝやとうとゝ思ひ給ふるひとをも白宮のうへを董の心也

○くさもみぢ　細露頭垂テ　董ハ色紙也

○はさいれ　四枚　中宮ヘさくれ　ほそ　女房ハ　ふとく

○あるところも　盃　あるところ〳〵もせん　董也

○衣くへなど　細　十月よる也　董の方よりとる

○いれもの　何　帳帷　壁代

歩びおそくふかくもあらじ
とおぼゆるも、ところ〴〵
て、歩びてくうちおとろ
かるゝを、
中〳〵なるものから、きゝ
めもなくて、きぬ〴〵のさま
いとをかしくて、
ところ〴〵も、女ごの出たち
どもあまたいでくるぞた
のもしげなる、
あるじの女房、さかづき
とりて、おかしうやなど、
おほせて、おかづかもちくるへ
ず、おろ〳〵なるべきにくれ
うひおほつかなんなどおぼして、

○いとおもしろくて　歌枕　董の私用と女三宮ヘのおほせ
宇治ヘ　ゆく也

○あるじ　花　後撰　うち山のとちをそとも
長月のもみぢいろこきあきはぎ
盃　紅葉ゆへ　宇治ヘ出ぬれとうちの
旬宮ヘ下定也

のこりのうちの女房のさうぞくなどいと
つゝましくて、ゆかしうおぼえんこと
まうけおきてもてなしおぼえまづ
さるべきやうにおぼしおきて
なほ〳〵なる女房のさうぞくなどみも
のおきて、ところ〴〵もてなさせたまふ。
十月一日ごろわたりたまふさま
なんとそ、うち〳〵ならず、紫
なんどぞ、おほくおほきにあざ
やかなるに、なほえのこりのもみぢ
うつくしきほどにおはしまし

○ことひろうて　孟也　ひとあれとるひろう
てゝくるくまいり約也
○さいとやうの中將　細　夕霧の息也　藏人少將
ゝそあり一人也

○うこよい　細　此中やうよい世ケ宇治宮を用
ひ給へ　或抄　董ろうひつくいまゝ
○ろう　孟　勿論也　必と以心也
○さゝきの春し　巴抄　ろせうゝての時ゝするを
董のよつゝくり約也

よろせもかいさうひのかしで
をのづゝこのろゝうて　たゝ乃
おほいのく事ゝ中將ものろ約　梅
ゝこのは納言なぐりでよをこアハ
つゝまつり約　でんへおかり
よいろのく中やどりゝ約んをぶろ
づさき海よおが也　さゝきの春も花
んよゝうひまのうこ　こ里ゝ松ろ
たうふことゝ女そ　ゝ約　梅のまゝれ
まのんなうあろうさやりうぶろ
おどこ海やうふやどゝ約つ　ふ
みのくろうさうこいん

○ろへゆりを　細　皆董よりさゝりゝ約ろるとも
ゝれへゆりをろのくゝ　巴抄　大君の心也

○心まろを　或抄　下待約也

○ゝうし乙　弄　白宮のゝ

○ふるさと　故郷　巖重の心也
○七夕ハうるはしも　花　弄よありて一夜ゆゑ
ひこぼしも我よりさうして思ふらんやと
細　年の一夜ばかりあふともしく紅葉を折
る舟とゝきて紅葉　の格の心をゆる也

○紅舟さうそうせて　弄　宇治院ゟ也ゟのときろ
かやうに後号平木院と

○ういせんらく　河　海仙乐又海青乐黄鐘調

○あるるの海ろ河いうるいあるるうんそ
てよ人をろろわれてそひいね
花　後撰　七夕の天川とろそをよさんやをち方
人のろれるろろ人　今ノ案白官ろろめるきるを
あるるの海ゆゆちしそしろろろ
細をろろ人八中君也
○ときるつをろ　故郷　文章博士の出題也
○とろちろて　細ろ官ろ出ろろ人しろ

○宰相のあよ　細　夕霧息
弄　向云右衛門督ろろ人随身とろろ随身
をろろ官ろや一巻　左右近衛左右衛門左右
兵衛出仕ろ以随身と具ち
せ

○のちのことも 敎秋 勾宮ハ東宮ともうすべきにハあらねど
なきかどの身ゆゑにこゝにハ不可然ものゝ
ことゝもなりてさるべきをやくしきに
○こゝやも中納言も 孟 ゝて中君(四出)
いかゞせん
○きよハうゝてと 敎秋 宇治(四出)の里見ゆる
一日ハ延留しものから
○こゝやの大夫 河 明石中宮大夫也
○うこよハ 孟 中君也
○人めしを 孟 歷ことわんとて中君ゝ
返ゝハるさ也
○ゝとゝまりぬ 細 不肖の人ハ權門のまゝ
うゝと

さき海てまつりおこうやう
のかゝるさいきのびおこともれば
をつゝことひろうてのちの
もなうざなりをやくしき
人ゞどもまこもかくて細おり
まつりをさゝめやうさ
て。なよゝかにてまうち
よりてなくおこもの
もらうとゞめてねのそもも
おくのかゝるをいきのうちをい
きゞどもひきれてあうひわ
つゝゝいうゝてとおゞとの文ゝの
乃ちまさうのかゝるこゝ
なれ給うゝうわゝそゝく
てらちかゝうゝおうんち
うこふいの文をゞなれ給
やうにてもなくいとまうぐち
てお給けうてゞもを孟ぐ
とうにつゞを給まで人ゝ
さゞかんまてゝうゝ
そすおうまうゝ給ゝ
ゝおうちよまゞらんひおさ
つゞうおゝいゞお給ちうゝ
ゝおてゞうゝ月日ハおゞつる

○ちるさかり　盃　こゝそ出ありて立ち
ばるゝと

○あかのひも　河六帖　紅葉のるゐして
細代よ、白波もよるゝ
花いそるをあかのひもとやとゝん何まり
てう我をとゝねと　水原抄云　庖丁譜よ水魚
よハ紅葉を敷とゝ
万水心うせなりてハ細代氷魚をうへのちてま
いりて魚をもりもるを
或抄　氷魚のうとしよ縁也
○人よもるゝひ　巴抄　あやきゝ多ハ人まろせ也
或抄　人くの魚それはそれはそれのて魚を
をとりのと

○中くあめ　細まて案内アせる也

○その春　細　ろせまりて也

○とろおて　細　故八宮よをおて姫君ち
まりまろくきと

○いとおもふ　或抄　姫君ともにのるを云也

○宰相中将　細　夕霧息

○いろもやも哥　細　その字清てよむへし　巴抄　木のもとをりなり　○あつまうと　細　董よりくだりを云也

○中納言　孟　董也

○さくらこそ哥　秀　花花落葉の無常をおもふ心也

○をちのなく　或抄　宰相中将の兄夕霧息也

○いろこそ哥　細　秋はゆきまんといつゝ艶ある面白　孟　これらし秋の立ちそめにけん

うやと人のいふこゝろをいふなり　あれど　そのづゝはのあれだ　いとまうしそめて物しおもはれ　のことよりめでこゝろのいろ抄　おもふらんと　宰相はれいく宰相中将

いつもやも哥のおもふ一ふみ　まちりこんや秋はきびしさわるゝ　ことゝうのていはれ物を　物うさのまゝまれなる哥　もゝ葉もつよるをまつ雁　いづこより秋のきぬらん山ふところ

○ふりくも哥　河ぬし山の岩ゝさ紅葉ちれ〳〵　ふる日のいろふかくて　石を塩のやうなるを云也岩ゝさ紅葉岩垣清水ともいふ　花後拾遺　ふりくもまれのらゆく里よ　心ふりくもさくら春ふる　秀　八宮の法の草木八つをよめるうちよりの次の初よ久しくふりぬる人ふる心也

○秋ぞそ哥　孟　八宮のまを云下ふ中君のまをよ心のひろれ八今ちと木のもとよ有へきうへ

○かのうちふく　細　以下草ふ地也

のびいでき物とやのちまで　うき人もおもふ里の岩ゝさふ　うちふるでもちくちのかはふ　物いきしひて出ふおもひ　秋ぞそくさびしきまふ　りしを見ふうちねの松風　そいでいく間ごとにふる　ようふる人ふをにうくおもひ　ちゝそのたちをちくれこちふ　ぐちさしてふをふ人ありまこと

○てうくしき 孟 やうのことをよろこぶ哥ハ出こゝろ
○うこよハ 細 宇治宮也
○さきのてふ 孟 前をよ壱也
○姫君ハ 或抄 以下大君の心也
○月ころの 河 古今いてん人ハとのことをおもひ月
草のうへにおきてと

孟 大君の心よりの句宮うつろひやすき心と思ひ

○叶人とするぬ 或抄 うよあうくくのよ也
○さうをしき 細 下とうへくそうとて
ハとるれとよいーと
○ともとするに 孟 上らうをいへくもくうと
うーて實るくさとよいーと
○あさきさきあつろ 細 故八宮も白宮とハあソ
ーくさとさ浮ーと

こしくらいつゝそえおうの
うずつろろみどのおり
ろこさおぐくちどやまとうさ
もてふつまておうまでいろぐ
ちさことおんやいこういうなぐ
めてごにんごろくるんごこお
すきおろけうひをとをうろ
までやゆうさだのこぐそ
うさおばこおこうまうけ
しうんぐもいとちおとと
ういおおいまてをとをとき
月なのいうおうかとうおうう

○あやしきまで 或抄 まへくのまで也白宮の心ねをしりてかくいふ也

○うへこそうき 乖中君をうへにおもひやりていふ也 巴抄 白宮の心をうへにおもひやりていふ

○こゝろもとよ 孟 こゝろもとなしとは人のまへにてはかくいふなり大君の心也

○さうしうへ 或抄 以下中君の心也

○あるにもあらぬ 万水 こゝろもとなしといふにおなじさもいふべきにあらねどおくゆかしき心ばへなれバ白宮の心をもち給へるにやとおぼしてかくいふ

○中くそ 万水 かくてとしの暮るゝをおもひそめたるあしたよりはなれんとおもふにやかくそうらふらんと口おしくうらめしき

○ていとうやまへ 或抄 以下中君の心也

○さはう海さふ 或抄 さはうの海さふの対面にをきて

○ありしあと 或抄 ありしあとのうちふりしひをぐさありしにもあらぬよのけうにいまもまたかゝるためしもあらんよ世中そらもおそろしうもはかなやとおぼしつゞけ

○巴柳ひらきて 或抄 中君のきこえさせ給ふを大君の口惜
○人をとくよ 巴抄 是より大君の心也
○ふるやうなる 孟 我もふるきやうにもてなしてふるめかしうもあるかな と也
○あるべき人乃 巴抄 伺候の女房共大君へ遣とし
中君よりもとらるゝと

のふるまひをも 或抄 父宮の遺言を思ひあくがれ給也
○うるさくや 孟 八宮のうやうにおもひ給へられぬにや と
○さてもそは 或抄 我方ともの宿縁あくがれ給ふにやと
○やうのものと 孟 一やうにもてなれてはと
○うるさと我 或抄 中君はもてなしや是非よ不及我ふるまひと

のいでたちを 或抄 伺候の女房共大君へ遣とし
中君よりもとらるゝと

○心ちも 細 まことに病もるごと

○おくれゐたり 孟大君のいろくよりおとれる也

○此君を 細 中君也

よきづまどうでおぐいてうちみまさよいでおくのうへんと
思ひつづけもこころもまどよくるをれがものもあぐり
ぬるぶ・ごでおうへんなのあるまでをおうれやりひつぢを
おくよおろそでぞそでおもんをもうおもいでころぐる
しきまさんをうれおもいでいふぶでうぐさしろうこと
おもんおうしくおうさ酒をおうれのうえでんぐう

もんぶ・ごでおうへんとやりしれ

○ごうるさく人 細 白宮といふ此まうちうち捨
おきていぬと

○うくろう人まうへ 或抄一度やうよりおとりそれも
ハ又ごうをそうるやいうさまうと又我又別の人
ようでいて世よまうろうおうんも心うしと

○此世よもいきう 或抄 兄弟とも此世の智い
出もうさ為と

○うちよ 或抄 禁中よう
○山さとの 細 ろうそくして紅葉かん卅姫君
ゆくと
○ふるのろん 或抄 夕霧息
○ねさとまろん 或抄 二条院又六条院也

やうまでひてと出さらおくひろ
をうちよう御出びごと
よう・おごこのかわりこともいろ
うのおびしろうろうぐ
しこかろ海と世人もてよ
りつまもうして歩つ猫外と
や物もれいばぼもこうり
るびさこもいとゆうさる
ろこさまて・たかこうふまろ
世おつ小室伯ろわこさろり
ろうとまびさてもいてさ
て・うちよつとさうろ也なる語

○中納言よの 盃 六君北白宮一のろを董のせう
ともひいろく
○うろあまう 花世の常ようろうしろあてくひと云
或抄 以下董の心也

○たのもの 弄 八宮のろ

たのもの六君のおもをうけひ
うどおびしろとうれど・そ
もてまう世おづくみさ
めろ・ぼ物こ夜さてわいる
くもを思ひわろさおぼまり
てやうろうや・ろづさ姿や
わりもんこのうろわこと
おびろりしさ海も・わそれな
ろもれづくこのそもをのほを
さ海もうひもてろうくく
てよおやろうくおろんこのおし
くもおびゆうおまりふべろ

○ふやし　孟　白宮也

○我ものとハ改拵　董の心さしハ大君ゐよ中君
ゆくゆくハあちきさまよ白宮へとりてやるつも也

○うへを乗　うへとものうへもる名世中
とありしうへの我身とおもふ

○ふやまして　細　白宮也

○ふやしまして　細　白宮也

○心ぶつさいて　細　明石中宮の戸ばかりを也　かゝる
らハこゝろぶつさいてゝ

○ちよと　細　此ことを白宮をハ
ばかりなるべし

○ちよれいて　細　十月也

○廿一宮のかよ　孟　白宮のまゐり給也

やうしもありとはいふうつきて
ておぼとゝおもひこゝろぶまいて也
てまつぎ海よのびやうぶりて白
給へすぢこゝろのやうしおこる
ようびうやかんのやうもびら
ゐるもいとうんうちおしきとぞ
ゝハゐうまやすく給時白いと
しそのびやうの日廿一宮の御
うふまゐり給へバおまへ
人ゐくもきびうず・ゐふ
御後ゐはんずうびう御
まてびうびて御ぬぐゐ

○又世ある女　世秋　うきうもるくあてよ皆よ
廿一宮のよるくしさて中君をなめんあるや

○うち出んとも　夏水　あかせ出さあんやうもるさ

○あの山里人　或抄　中君の姫宮ちよあるうれ
まうきと

○こひもろ男　弄　何の物語ともなくと

○よろくろく　細　我出男の上よ似るる也

○もてやし　或抄　ようをそくく

○うゑ　弄　宇治へ也　繪のる也

○さい五ノ物語　細　伊勢物語の繪なくし琴ぬよ大
和物語よあるよ　河海よあり然共當時流布の本よ
ハこれる

○人のむもろん　河　伊勢物語　昔男ありくこのや
ありをうとを又をうてうるる又われよをうる又
ゆる若草をへのむをろんよをそやと生きうくし
初草のるとめるしきとのくをうるりのを

えおぐうるおくあてふまさる
さ初かくおもひうおやくさ御
けうひをうくなうるさ初よ出
ひまうおて　みこのかまる御よ
るずる女人妻ふまうんや法皇
の姫宮なうこと御おぼしの程
うちくのおきうひもろろおて
なのまでこちいぞんろもおく
おぐくつるようのおぞくへを
らうたをふあてあうろのをう
なるまぐさうるおぐまひ
出るよいとぐんひさまるおぐ
さあよおるどものあまさちう
うをへ女おへでおうをなる
世のまる御うさるをうへ
らうことおほくてれおともり
おへぐすうきさ初てうこと
へなもへとおがとさいごが物語
うさていぐうるふえんをくへ
うるうのへのむとぐんとうのる
をさていぐおがとんをこー

ありひきのこの
○いもこ人のへも 或秋 白宮の羽也

○をしまさうなそ 細 白宮のを一巻脱也

○吹く物へそ 細 別腹をといふうるくし也
女子の道へ用意よきうまれ心毛詩も兄
弟父子よりとをさまれといふ

ちくまうらおてゐる人のへも或秋 白宮の羽也
○をしまさうなそ 細 白宮のを一巻脱也
○吹く物へそ 細 別腹をといふうるくし也
女子の道へ用意よきうまれ心毛詩も兄
弟父子よりとをさまれといふ

○若草の哥 白宮也 細 有へきをとハ心をまもる
巴投 寝へ根とうなて也

○世々をハ 細 白宮也

○こゝもとゝ 細 廿一宮の所心也

○とうそ 弄 廿一宮のところとゝ
○うちなひきのを 花 在五中将のうりこのかみ
めつらしきものをとハいつハさおてこゝろ
おく人ハ廿一宮ハ白宮の所返うハこゝろおかるゝし
○紫上乃 細 以下草子地也

○忠のうろひ 花 世中のくろ心ハ花ろ吹ろ
ろひやまきりのようにあります
細 白官の治心也廿二官の四方ハ廿房屋也

○まろなし法 細 守治也

おくやりひろうしやうえ法ろ吹ろ世ハ
おくうろさまえ法のてまろ面
くでもろろかふをろうあろ和
あろをろうろひびあろうやどと
なまくんのれもとあおでもいと
おろろおろうろのうろのやを
おろろめでくろんでよろうかく
くろいつさおでおろうのう
つろをおがしまろおろと
なさおろうをとづまおろで
月はくろ法やしおろもろと
くろまとんろろうておを

○中納言あろ 孟 董の守治へ也
○うやまくろ 細 大君也

○ねろさろ 細 董の羽也ねろさろて也

○ろろろ 或秩 大君也

○ふやの心も 細 董の語也大君をうらくさみ給ひ
人をうらしめよりおもひ出ることろ
うらめしと

○うらはしも 或抄 大君の詞也中君ハ何と
の給ハすとも
○うきよの 或抄 八宮の遺誡をひめうら給ふ

○いとゆふ 細 董の心也

給てでをめてゐてゐて泣給ふ
ぎはいつくにおどやうえ給ふやの
ゐるもゆでおもひ
まき所なくうらやましく給て
のどふおもひ出ることもつゐもて
てゐることやうえ給ふおどうへ
きこと給てでこそのかとおもく
もやうえ給ハざりふ紀人の
ゐつきめハうることおこととん
ゐうぐりふんいとおしうけ
もてお紀給ふきふいとん
ぐうしうとまさへづりふ

○世中ハ 細 董の詞也 花 世中ハそもくて
もあるめへし ふやもうそうやもそれハ

○うつろやうつろハ 或抄 白宮の心をそへ給て
一方むさようふそて給ふ也

○人のゆうくと 細 白宮のをそうとうち
ていうく

して世中ハてもうてもなろ
き所まてるふとうくふん給
をいうあることをもゐんじ
ゐうろどもはいとようう
めおどおぼとともわんを
しおてゐかりのどえよふうく
めうつうにわでとうんうの
ゐうふおどふ人のゆうくをうくふ
もふついあやしくおぼやようく
まてゐてぐうぶふ給へれば
うとうく人のゆまうのうくふ
中のをのうくぶふんれば

しうとをまこいのの或秋 例あくまでとありてむさ
のうへ出給へり也
○くまうひ酒 孟大君のはうひをえ舞ふ事
ゝありてあり〳〵と酒と董の羽也
○なりしのまゝ 或秋 ありつるまゝ也

○いと足らう〳〵 細 大君の心也
○いとゝ〳〵こまやと 孟 大君我分をとく果
ゝとゝと
○見ひろまる〳〵 或秋 ゆくひうき也
○るう〳〵と 孟 董のるう人てあれとおほ
心ふかもさとろま見ま大君のおぶ也

○水もらう〳〵 或秋 董の羽也
○さのふかり 細 さのみれとゝるゝ
○きふはいと 或秋 大君の羽也
○さうにいるきま 弄姫君のかう人〳〵
○いと長ま 細 董の心
○むねつれて 巴秋 るく成ぬんとそうるう
きうと

○くるうて 或秋 大君の羽也

おかしひおつうこうろぐへも長
ふうみのわたよすこもまも
くちびるやまのみづうそだ
よやのえさもんとあまこび見ろ
ふまこびやそこいとうる
うんさうごるこふとひおし
おつりいこまよいふおし近
こさうあんまうなう
きれうこさるもひはぼま
ておのまこびちううつろ
づのこをやのこおるまそえ
やえんごとうなうんぞま

○さとうよ　細　薫のまろうどの名也

○雨さう　細　此つゐてよ京へ出一ぱんとゝ

○此君のれうと　乗　薫の供ひ人也

○こゝろまろさん人　巴掬　宇治の世尼君六へ近付
たり

とていとうしとおもへる気色なるをひかうかうしくもてなしてあげさせたてまつりてふすまなどとりてをれば
いとうちあてまゐれどうち解
うちとけをまゐるをうれしくもてなして
さるべきことなどうちのたまひなして
みるはいのこゝろよりいとくの
ぬきて出ぬ　このきみの
ことをあるじの

○このうやれ　取掬　白宮のうをうたう也

○世うさハ　乗　六の君うぢ人のう

○うやいさうくよ　取掬　白宮六君のうをうたう
ゆさそもりひろくんとゝ

ところをうちひろうたう
のうたのあらましのごとくの
えのおもてのびわうさ也をうち
おりて　うちのこうおりまして
ことばの出ぬべきをあやしう
うちうめきて
いとうしとおもへる
すきごとうちつゞけなどは
いまてゐ　みぐ后のいまうよ

○我ものそて 弄 薑のタ

○めもあやよ 弄 目も不及の心也ゝゝさきさうな
細ゐゝろくハゝり人のゐゝる也

○さゝそひつき 細やゝようつゝと又
傳くゝこゝの人ゐゝる也
○さゝ許すも 弄 あの君のさゝ許也
或秩 以下大君の心也
○今ハさゝり 万水 これまでそて有と云心也

きづまり給てもあるべきと。
ゐぐねてそをあやしう人は
に給らず。おまゝまかおりまして。
人まもてるやまれ給へてよ
くゐゝり給のこゝんかもあやよ
おがうをるあてく人やるで
くゝりげろをさこれひつ里なで
人ぐのはてそくゝろをもる給。
いくぐしひてぐりて。ほなぐり
みてそわかれやしぐなくゝろ
ふさぐまへ給ゝのおなり
のはとそひようまでおがゝん

○ゝこのくゝのさゝり 或秩 心よハさもるをわゝ祖
よハねんゐゝろゐゝ

○人のれつさ 孟 白宮のつきゝるもめゝとゝ

○ゝゝくゝさ心ゐ 孟 頌中よやうれをきをハ
と大君の心也

○きゝめやゝそ 或秩 大君也

○姫君物ゐつくゝさの 弄 中君れタ
河ゝゝらのあやれいさめゝゝてねハおゐ
ときのゐゝきゝてあくきろ
細此巻ゝ未へゝさのへゝり

をさすふは納こふぐのさうん
ゐろをおがりてゝこのハのぐゝり
うゝさあろゝとおりひかゝ
給ふゝもくもんの御てきハ
りひさゝ里ど。いぐ月の亜
ぞゐろなさくゐゐらてきれ
和給てゝようさ御ゝゐらハいく
世ふゐてまんべゐもおばゝぞ。
いづゝぞかろんぐよハあねど。
さろんゐろゝ里れぐさん
やゝそれね給へゐを姫君和ゝ
ゐのヨぞてゆゝうゝねの

○ふやすく　也歟　わか君中君のうへをいふ也

○ちやのいさり　或抄　まへの引哥の心也

○つゐねのこうし　或抄　父宮八ノ地獄よりおちてなくと也

○あてこうさう　或抄　大君也　草ノ地也

○まろふとちるく　万水ひもゝのまろふ也

○あをそこおろす　或抄　ちゝ病重りおもてに顔色なきをいふ也

○ひろわの君　細　中君也

○れうくハ 孟 中君のねをされくの躰也

○いさゝ物もの 万水うくくて物もの人のやうにもものさ也

○こゝやの 細 中君の夢也中君の羽也

○うせふてのち 細 大君の羽

わすさよおやうれてわさわび給つゝふびさうとうろがりるやうのいろありひよおかれハことさうふろめるわりくんやよいとおうくるくくていさう物おの人べらまもしおつゝ。こゝやの号メよりんこおつゝいと初おびくろそくさまてこのゝうりみこそかのめさおつまてくろう。給まバいとゞくうのたひ。てせおそないそでゆるもも人をもうんとおりみをさくよ

○世くろめをられ 或抄 大君の心也

○活んかをを 孟 そうよ物をおりよかとよ後世をおりひやう多〳〵

○人の国よ 河九華帳深夜悄こ反魂香及主人魂之人之魂在何許香炉引到焚香處 白氏文集 李主人うせて後漢武帝幷泉殿のうちよ彼形を圖して方士をして霊茉と合すしめて金炉よ焚くハ香の烟化中列記云聚窟列在西海中由来地上有大樹与楓木相似而葉葉香聞數百里名為反魂樹死屍在地聞氣仍活云〳〵

○おりハをて 細 これうくくろ時節也

○れさハ 細 中君也

○うをを心うくくく 細 大君の教訓を哀也

○これより 孟 白宮よりも又あさうろくのひ
くをていとく

○さやうろう 細 あさうろも白宮のようひ給ふ
人のろくの又と人のまろかいーく心うろくいかにと
くおいろうろ人のやうに心うろくいかにと
ろめろもをまもりても此人の
ひ出ゆのえ給ふんよまあろうなり
あろまでこころろつろみんを
えろうでとまりつべつろさめづ
ちんこのまま出ろとはふ給へべ
をろうさんとおぼしめろとて
いろいう給ふとうよくうわを
いつまで給ふろうわまべろ時も

○あをろぬ 河 あをろぬ命と号へとろれぬ
をふいへてろろりをれ
○ろうーあありさ 河 岩ろろ山弁の水をむをい
あをてろうーあありさいのろとろーろ
細 中君ゆへてそいのろもありをれとく

○ろうひろいハ哥 白宮也 細 をよの時雨ハいろれ
ろやくーへろてさまをてこひーさとく
也抄 求ろう宇治へいかとへてろれとも心ハ宇治よ
有よへろろをいろれハ時双のありろろるさ
をろつろそくく
○ろく神ひつろ 細 引哥ろくろるろう神無月ハも
時双ハなしとろく神ひつろありハろうを
河海 引哥ろ句ハろへをも昔も行末もあり
○ろんろれのろを 細 そもろろりをのありろとく
或抄 大君の心也

○ろうひろいハ哥 白宮也 細 をよの時雨ハいろれ
ろやくーへろてさまをてこひーさとく
也抄 求ろう宇治へいかとへてろれとも心ハ宇治よ
有よへろろをいろれハ時双のありろろるさ
をろつろそくく
○ろく神ひつろ 細 引哥ろくろるろう神無月ハも
時双ハなしとろく神ひつろありハろうを
河海 引哥ろ句ハろへをも昔も行末もあり
○ろんろれのろを 細 そもろろりをのありろとく
或抄 大君の心也

○さいくう世よ　細句宮よ八人のうちひさやとうくしと
しぶこうめこまうまるまうおさぶうわ
世よまうぶこまうまるまうおさぶうまうまうち
をいくぐいでくまうでうまうん
しこのまうくぐんよりてか
ぬくまぶうまうまうくまうまうまう

○大名や　細　明石中宮也
或抄　中宮白宮へ教訓の詞也まつ夕霧の中将を
本意ありてその外はさしもよひとりて
ものつゐひなどへとも申ひありきうはきこと

○おとゝしさ月ハ　四抄　中宮へ白宮のおもひめをも
細あつとその同心をさき也

○つきめハ　細中君へうの月ともせなくしとも

○心とゝろ　細　白宮の心を宇治よハ考てさうとも

○中納言も　細　董も白宮とハ不知ゝ抄也

さうもとゝもとゝひやうえんもうもいと
おしく心ぐるおぼえつゝおきうく糸
抄ずおぼつかなくいふかとゝひ
やえ抄この月ともありてハをうと
ようおぼえとゝもおぼえやうおぼえ
やをとゝうおぼえつゝおこるて
公白人ともおもおもはるゝよいふかん
と申おぼえつゝもてゐりあさことの
ちげうひ申をとゝまりて抄をと
はいをとゝりとゝて抄までとの抄ひ
をとゝまるをとゝうとゝもとゝ
とゝわざりをもつへし抄をもと

○おもくまつり抄ハを　孟　董の曲ゝうとゝて白
宮へまつり抄也
○山里よハ　細　董より宇治へとひ抄也
○此月と　四抄　大君の不例よさと

○とゝうとゝて　孟　本復のまてやをうとんと

○例の老人　或抜　弁君う大君の病体と薫へうちまつもる也

○此ひとやの出る　細　白官のうちひろる也

○世よ心う〳〵　或抜　弁君う我身と白もう也

いとくるしう　例のあらじ〳〵ことそ　かのそ泊きこゆうことと　いつきわもなくおぢろ〳〵　うつゝかるやうなるものを　ん文　おさえしめさゝれたまうわくら　抜うどのえうふおりまさうちふ　このえの御事あまりおちいと　とものおぢろき泊まてそうきか　ひそものこに御らんいまさら　しうりうやわさ泊くうくふ　抜てそうふのむべくもうとを　うじ世むろうくおろうあの

○うきうつゝとも　盃　そきかうの出るうひ　ときう白ふいふと薫の詞也

○あうしうさま　細ま人〳〵ふ〳〵ー不也

○う〳〵ー　或抜　薫の詞也

○といのめぐり　盂　宇治のめぐり也

○といのめぐりよ　万水いろと薫のごとくにて　恨
まもとうづやとまりつせ　芝へかりをさとま
りつせんともれハせをそ　返くてうよとそれ病者
のそとるひとりねてそ　屏風をとこそまもら
れ

○此中を　世捨　薫とめる君との中をるれ
まうさくと

○そやらう　世捨　初夜

○ふとり入て　或捨　薫也

がつうぐやりつよのあさとく　恨
て何のわざをやほろこせふさる
わうとはなのりんのごうわまる
きじ　海辺遠浦わろ　狩
りめせおりんとそごふくまる
さうつごひこーもの人さうざ
れバこうばうさうかく
やりまつ　雪あるもバまの
わるこかとなくて　ひをもで
ふしをれんとをれどもうそてだ
ひをもんとて　前のいこ人待の
庭ふれバひごりかうとうと

きらうこさうふ屏風かとうれも
て入る　中の君うとやがれ
と　世中をやとりてうふ　待うる
ありやうとんあこひてうくも
そふ　ひてなるぶ　ゆうらで
めくは　気色をうりまも　ふ
ううううさうぐうさんていさう
う　ふいうるこの前のうふうて
月ハうさよ　まてをりわぐく
もうまぶ　今くうまり　ふへバ
ふべでもこそでぶ　ふ中の
ふんふうとうまもバとん

○すもゝれ 一名を 或秋 薫の羽也

○こちよハ 細 大君の羽也

○ゐなかうぐひす 孟 薫よもんさんもすてる
ほうほけきやう

○うぐひす 孟 薫の羽也

○さうもく 花 さうもくさ也ともつもる 声也
或秋ともとるくハつくうぐひす也

○ほとゝぎす 花 しゝよ熱氣の有を云也
○ほうちの次 細 薫の羽也

○ゑのころもさ 或秋 大君のつまなうしするを
下よねうこう羽也 花 六帖三尺こうの神よ
うれてきてゝうこひてあるを何のつまそも

○山ほもひもそ 孟 薫也

○ひてう尺なり 細 中君へ薫のト好也

○ものの〳〵 或秋 薫のようのものくさ

乃つまもあるはこちふく人のあるさ
おもてそくふわれ御ふくよ
さまあてそくものとありくさ
こしる人へいるさうもつうら
もおばてゞをてさ好う
いぐるよくまあてう好
つをしおくふんてゐるん
ちやんとしゐもおて好
ひんをうぶこんふうも
やとそゞずおぐをはこんこんひ
ぞにうやまおもや也
ついものゞぐべくまし好

○うしろめたき　或抹　中君の心也

○ひさかりてよハ　細　薫也

○いとくく　巴抹　大君の心也

○めくろく　弁　匂宮よりくくしろ之薫ハれん
ろうたうと

○うしまるも　巴抹　薫と心こゝろしとまさ
あるそおもふらんと

○人とくくのう　或抹　薫の女房さらをりよ
かりおる也

○いろのうつりや　或抹　薫の心也

○ちよ　花　夜居の加持を云也

○あひれ　花老の声れんらる也嘆の字也

○くらつきて　河　功付ろ也

○いくこうしハ　或抹　あさりの山病気を伺也

ばうしろめたきものから或抹中君の心也

○ひさかりてよハ細薫也

○いとくく巴抹大君の心也

○めくろく弁匂宮よりくくしろ之薫ハれん
ろうたうと

○うしまるも巴抹薫と心こゝろしとまさ
あるそおもふらんと

○人とくくのう或抹薫の女房さらをりよ
かりおる也

○いろのうつりや或抹薫の心也

○ちよ花夜居の加持を云也

○あひれ花老の声れんらる也嘆の字也

○くらつきて河功付ろ也

○いくこうしハ或抹あさりの山病気を伺也

○くるまちく〳〵 弄 あそぶのこゝろ

○さらつろ 河 近曽

○世中とねり 或抄 八宮の夢中の引也

○いさゝうちわひ〳〵 巴抄 姫君達のこゝろ

○ま〳〵むつかしき 或抄 功徳とせんこと 或佛とをもひ
ひろめんこと

○うたゝ〳〵ろ 巴抄 これ〻相應してこと

○うち〳〵の念佛 河 阿弥陀の念佛とこゝろ
巴抄 不断念佛なり

○さうなきやう〳〵 河 我深敬汝等不敢輕慢 恐汝等皆行菩薩道當得作佛 法華經不輕菩薩品 尺尊同位に不輕菩薩〳〵て世〻四字の偈を唱て四衆を礼拝し給也一切衆生に佛性有ゆへに拝し給也 細つゝみ礼拝也

○うの世にて 或抄 大君の心也 世〻そなたうひの心とおもひしのちはかなくてわかれたまふことをうらみ給〳〵也

○まことさまかう花 三有と云ハ本有中有生有と云 さ定まりぬるなんとハ中有の事と云也

○まことて〳〵 河 詣て也

つゝまうろぐ〳〵 恐給ての儀と云 ねぐらふもぐひて 大君也 いぐ〳〵 あさの世おくれまいらせ 心もとなくおぼしつゝけさせたまふことをうらみ給 ぞゆるもんつゝのことをうらむ 心ちよものぐ〳〵 ゝえへぬ儀 恐給ての儀と云 さ定まりぬるなんとハ中有の事と云也 まことて〳〵 河 詣て也

○いとくくつく 河 礼拝のさ也 額突と云也

○ありやうく 弄 董也

○本歌のまゝ 細 董中君ま也 万

○ありさま 弄 物ごゝろ法事也

○霜さゆる哥 細 董也世の常ならぬ法のたとなし又〳〵さとて千鳥の声をりにて不軽のあり
うたこゝろ殊勝也毛詩関雎篇と后妃の徳といふんとて雎鳩のさとそふる類也
○つまどうさんの 弄 匂宮ま董ま似たり

○ありさの哥 中君也
弄 中君のさまつくと物ごゝろ
○ありくさ 弄 元人のつくるとそ

○いとくくつく 河 礼拝のさ也額突と云
○ありやうく 弄 董也
○本歌のまゝ 細 董中君ま也 万

のさくるまて云也 哥突と云也
をおろさぐくあまでわつかに
乃さづ面おろしてぱ門
おもふかおていとくはく
ありのすさのこのうちぐくて
ありはさうてお□ま□のれ
おろすほのまゝ也ちかづくる
てぐのこるまゝのうちよ
うおつるもうひとさおひて
おぎやかおのおうおひて

○霜さゆる哥 細 董也世の常ならぬ法のたとなし又〳〵さとて千鳥の声をりにて不軽のあり
うたこゝろ殊勝也毛詩関雎篇と后妃の徳といふんとて雎鳩のさとそふる類也
○つまどうさんの 弄 匂宮ま董ま似たり

○ありさの哥 中君也
弄 中君のさまつくと物ごゝろ
○ありくさ 弄 元人のつくるとそ

のこるかいてこうもおひはん
おおくさ□□□□□
あるてだにとくくそ□□□
ありさのおうおひて
明るあかおうおひて納
のやおかおえ□□□
出うひもうひて□□□
うさとでいくうて弁て
でほのこ名

ありさの哥 中君
ありくさの哥 元人の心をやりるおうて
うたおうおれでゆくあくそ

○ゝのてゝる〻 細 中君大君のまをそう
或抄 八宮以後ハ何ゝし大君ゝまゝをしへ
と中君の心也 一説薫の心

○ゝやのゝろよ 弄 薫の心故官れゝる也

○あまそゝてし 花 朱花物語宇治とのゝて
具平親王ひこゝゝろ故親王うせて後三条院の
れ世とあそ也ゝりゆゝゝ宇治とのゝ物のをゝまゝ
ひ給て絶入給よをゝりもそゝわりて具平の尼ご
あゝれ給て此世よゝてゝ天くをゝりて名のり
給ゝ〻ゝ

○あゝまゝゝれ寺 弄 八宮の念佛ゝこゝろの
寺ゝそゝゝひの調経也

○ゝゝろゝゝ 弄 先ハ今ののゝり也

○あゝやをゝし 花 腹文 請腹若干簡日
脇依某事取請如件 以脇人者治病ゝ
年 日 日 官位姓名
細 薫の腹文を出てゝゝのゝろ也

○まゝろゝゝ 或抄 陰陽道の祈禱也

○物のゝゝろさ 或抄 物気ゝゝそゝゝ

○ゝろゝゝし 孟大君の本復ゝそゝゝあん
と八念ゝ給て何ゝゝゝそゝゝもんと也

○此君の 弄 薫ゝゝそひ給ゝる
○のゝゝゝ 或抄 内證のゝるまゝさ也

○うちとく 盂 大君の出家を見んと

○いて此ら 花 出家の心也

○さまでさうさ 或抄 董ニ對してハえひ侍ハ

○心らのつゝく 或抄ノ大君の初也中君ニの心也

○いむる人 花受戒の心也世の戒をうけといてハ
ひさいの女とをやてさを尼と云りの心也
○いのちのつゞ 盂 病の初りさゝさ出家をれハい
のちあるうちゝ

ものゝとんごろやとうどう
うろぶちてこゝろ元ちの
らだやまひのとこまてくち
をもつてんさそのとちるごさ
心をもてまおんちつごさこゝ
あれくやりひしてどわれて
もかろうそもいてこのこつと
しんとをき向てう
さこゝえすおおそ中の
こちのひくそおりまおく
ゆちをいひてるんいてまるこも
いのちのつゞ盂病の初りさゝさ出家をれハい
のちあるうちゝ

○ふのゝへまゐ 董まくらひつる也

○おりくく 或抄 董へゐさと尺まいる事也

○ものくろゝの 或抄 董の家来のくく私ニ
大君のいのりとをる也

わざうかのおいてまのこおいでんか
ちきさうおいていてあるまで北所
てありくくろうおがまそおる
はかでもいでおうきやう
うひまこおんとげるたてふ
おりひてなりいでもつおい
ゐーうおとくこうあ事
いきつびくゐてひょうへ
ねしおくもあうそあるが
うとてくおちてこのべ
きてまもしるとおくろづ
のいのうをやさをるびさ也

○こよのあくる年辰の日也 都人ハ雪しろ六
ひかり花のごとくふきて雪ハ
うつる袖わかてしうわまでも
やとのいとうもわ
こんやうのどころがなくて
うくてやとゝべかうや契
いうこもとどうしひづもひて
ろうらうるろうりく
かれどもこれも例ぬ袖
よりてひつゝまてもの発句
もおくるてハ

○例の妻ノ 河いさゝと例ノ遠例ノ乗ノ 六ノ也
孟 大君ヲ本復させ奉ルとさゝく

○ひろうるく 細雪の降ル也

○こてて 或拗 大君のうちゝを拗ハさりしる 也

○うきくりく哥 薑也 花 高光集ありくうせて
の年新嘗會の比内へもえまいりて内侍のも
霜ふりのうりさう門よさこりきこのひうをとゝみ
そるすゝさ 今案新嘗會豊明節會ハ小忌を
さうく日くをのうつゝと云物を冠よろう也日蔭草を
さう蕎もの糸うてもひてうくろ八日を草
よゝさとう也日蔭を攻てうつゝとゝ日本紀乃
才一よあり是とうゝとをろう也

○うやさうれ或拗 くろうやさて也

○いくおりうく 細 薑大君ヘ下ル也

○りのおもしす　細　大君のさま也

○ちちうへさひま　細　ちちのおもとのいてまそ　大君の羽

○いとくせさしも　葬　薫のう

○いふくちさり　或拔　以下薫の心也

○うさかなそよ　或拔　後拾遺　今ちとちとうそのるとも
ひ出てよとちとうかりけるさはの哥心也

○ひいるさと　或拔　大君の病養しのへるをきこへう

○ゐくとも　或拔　髮のおちおそうて多もるさ也

つくこともかくて別そまろ
ぶなみそうこそ浪をでだ
ひ出もでるんやひさ海と
もも世んとまりまでいふく長
まかおくくおうこれ浪
おとひ月のいふどもいそう
ひてうのやふらびのもの
かいろおひうてどろうろ
うまふおくうてはさは
おどものおとひうふ海
をそやてはかもうさひ
とうもとんこらうてはだハ

○あるべき物ぞと 巴掇 令のかゝるのゝを愚弄也

○さうあり 或掇 世常にそいふんとうつろひろふもまさわろゝ

○玉一のを 盂 董の心也

○沓いようにて 或掇 董の羽

いとうてもあるべきでもうやうにてつもりもちまさはのつゞくとあでさうおうげうもいまるもうおひんともろべきでもべきあもわざありとうんろうおゝさしたぐひかゝ一ろくるやうにもつろいあをうのゝこうさをどうづまおうごうあうてこまろうみんもおうまうてまろうよみろまろよ玉一のもまうんさうおゝ終よりおをおうて

○さうありて 巴掇 さうあり令にそいふもうゝゝとゝ

○ゝうおうろん 弄 中君のゝ

○このゝを 巴掇 中君のゝをよろこび返答あんとそのゝさうゝ也

○ゝゝさか 細 大君の羽

○叫ゝうおろん 或掇 中君をゆうおろゝる也

○さく〳〵語とさゝ〵巴紋 白宮〈中立今さゝ曲るさ
とるさく〳〵し

○とるりめく〳〵或紋 花のこ執着るさんとゝ

○くいろ〳〵 乗 薫の刊

○花ありしきよ 巴紋 中君まとおりめ、よ
薫のさひとるさくやーさゝとゝ

○うしろめさゝる 或紋 中君のさをゝ心のう
るひ語よゝとゝ

○ふしぎ〳〵語とさゝ〵巴紋 白宮〈中立今さゝ曲るさ
とるさく〳〵し

○とるりめく〳〵或紋 花のこ執着るさんとゝ

○くいろ〳〵 乗 薫の刊

○花ありしきよ 巴紋 中君まとおりめ、よ
薫のさひとるさくやーさゝとゝ

○うしろめさゝる 或紋 中君のさをゝ心のう
るひ語よゝとゝ

○もろめ語 巴紋 佛道よ引いめんとそ物ゝとを
をさせ語りとゝ

○あとろも 河 伊勢物語 めそこ世もる
あとろとそるをとるひる

八姫君のおさりどもりしの巴紋
ふぐくまらぬんさうごうして
船もあり世紋我も仏をわん
世さをおこさうごうかし世年
をとさよいとひさるれた
り紋なるのいさくいご
さものいおも世紋もわん
ひるまふ物のまめやふて
こえそ紋あるいいごさご
うかしじべさうかーあり
どうもさうぐく人のさの
とんともぞどうごう

○例のさうさ　或抜　老人ともも也

○ひささを　細中君と避さる也

○いとうるす　或抜　真實死去ともとくれともと云

○ひーさの河うせんハうをのぼりもすさめ
ぬるさ此山をうしろよしと

とんなるをおひくぼまのをく
まづこゝりひまさの如くこゝ海
もこゝうるりおつみもわど
んこゝをゝ例のさうこゝあづ
い海をいよゆーこゝこゝいさ
さもすゝ例えおいかゝ
いこゝかゝるあづ芸と云
して此ゝるづをちうかゞ
んもうおよゝうおゝも
さねおへゝあてゝうおゝ
さろうかゝうゝまて
ふゝのゝうゝかゞ

花蛺也　虫のとりをろとらふ也
盃うそもをさて乃ゝさゝ董の心也

○うゝよゝうそて　盃　今ハさてうよゝそのうゝとらひ出
てゝうゝろハりのうさゝ此寄そ春皆うせ
也

のやうそもこゝろうさゝうづてゝりのまゝどころ此まうの一と
どもをろよおゝてとゝさゝあるはと
みうりのゝうゝさゝあるうゝかゝ
うのようるうゝうかゞうづけ
もうゞゝおゝゞうてこの人
をすうもあのあるうゝさひ
さ海さんまゝふゝの中此ゝうん
すてまうゝさるゞあゝばゝうう
ゞおうさゝのゝゞさもゝ
あゞおうゝをゞてうまを也お
てゝ此あ仏和んしおゝどいゝ

ろうとをわかむ　花　小法巻とも此訓あり蓁巻よ
りとりそへてあり但足と空とではいそうきよ
時のる也えとをわかむ心のかもしくうろ
しろ躰也
○そうもありく　花あをるきの君やせさかひ
て虫のくれやうれい今この時れをうもむと
かうるかとるくと時のろよわくうるうろ
○ろうぬな　哉拯　董　葬　石より帰ぬ也
○ほいろよ　細　董のまるまりくく多也
○人のろろん　哉拯　中君のこ大君ハ中君とろわ
うひ拯てやまひつきてうほ話しく人のろふ
ろんともろうしさ者のうろうまうさうく
正氣もまるまる也
○ろやうも　哉拯　白宮より中君へ也
○まるしし　巴拯　白宮とわひ君のつしとおり
心をるとろてわしゆうと
○かいともんと　孟　董の人道せんとろくとも
○此君の　巴拯　中君也

おりんのどうんろかくのこわまハ
いうひなくて、ぬろうるろのろうよ
ばたるくとてんとみりかて、
よく例のさわくうもすうぞ
わさ海くりけるえをあまよ
まてもひつくうのろ海
まろうるばてなうもおく
しとろをまめうまあるも、
あるくとあれそうろ名、
拯のふもるとうとおくく
てくろうがうさいとうまれ
あうぬまでほ初君ハ人のろんふ

ろうくろひうのくうぬろうまうく
うろひ、そひろうあくふふ人
日尺こ名、あうもぬうひ
いと志ぎくなまて毎のつ
とおりんのこ名うしまそこ
ぎりのとでやあうとおが
すふいとまんの出のるり、
中初そうせのてころうぶ
ぬうつくるおいぬんとぶれ
ど、ろ来乃えのおぎんとう
てかるとこのまの時よのこころ
ぐるまさよ、ぎりいみぐまて

○考のハ巴扨 男を分ケ(ル)ひ(ト)ハ兄弟ある(ヒ)君よ心ちクく(ト)

○うねとくも 巴扨 白宮の巳無音よ中君物ゐ(ル)

○つさ(ヒ)ゐ 或扨 大君のタれつさせみくりのなくさめ(ト)

○世の人を孟 クかとよめりめとハ一段(ト)しろうとくし皆ゐ(ト)

○もろし 河考養也

○うこうあれハ 乗 董と姫君と一度の契もなくさめよ服衣をときおくる

○うのハ方乃 或扨 大君あ(ツ)ひ(ト)世房(ト)ち也

○紅ゐ哥 董也 細本妻そなきゆへ也さうな(ト)人(ト)のさろとろ(ト)やクの也

○ゆ(ト)色の 花 紅のさ丸きぬハ氷のやうよへゆ也河海よ泪の氷よりひまゐ不可然やクとゐ(ト)しろハ姫て泪のタとゐ(ト)氷ともゐ(ト)クのハ折さゐの色つやとらゐと心得(ル)し

巴扨 ともゐハとろんの也めうく(ト)不のかるそハ大ありろへし紅のさゐとおろさ(ト)ハをろ氷のてゐ(ト)ハ(ル)ハ(ル)ハ(ル

○ふりしきる　或抄　大君のゑ也人〳〵のゑ也
かりとりそよ乃人〳〵ゑりそきと〳〵

○ふるくる　巴抄　中君とも又の君ともかゝ
ひさとして可ㇾ也
○咄かりさよ　細流　中君へ戸ㇾ也

○ふたつのそ　或抄　中君の心也

○此君ハ　幸　中君也　幸二のゑ〳〵

○こゝろさをそ〳〵　孟大やうの躰ありて
ゑ〳〵心のそゑやうそ〳〵大君と〳〵

○世のつれ〳〵冷〳〵さ　河清水納言の花草子ゑ冷物
ゑ〳〵その月夜をそ〳〵のそをそ〳〵　在端

○ひうひの寺ハ　河遺愛寺鐘聲欹枕聽香爐
雪撥簾看　乐天　拾遺　山寺のへめひけりのゑ

ここのをふもとれもとてそうすき
。きつもとれもと花夜のゆうをきつもとれもとうち
夜の明て昨日のゆうべ心也又夜の明て今日のゆうべ
ハきつもやうそとれもとうさ心よめる也
弁唯今夕よめす古哥の心と夜鐘よめる也
。をとわと哥葉也 盃自画そはよう

。うるの山の鏡と花雪のそ
細州刊宇治よりあり云々

。うろうよりさ出て細めるもさまて云々也

乃鐘のこゑまつうをそたゞて
うみもらねとうするうひき
をきて
をうゐとえの月をまて
給ふともしべかこの世から神と
あのいとまもこ也ぜ也
きねよ空の心のかことも
汀のうわ月ゆかしとも
ろし。京のあのさうかくとみ
ぐも。えうこわうこやくうる。
ゆうべふいつきて
ばかりとをふまくうひ

。こひうひて哥董也 細雪山ハ仙茅のあう来也
されハ花ろ茅もあろへしと面白趣而もろへし

。うろとなる偈河 諸行無常是生滅法生滅こ已寂
滅為楽 涅槃経 雪山童子永法有千ふ夜ゐ現
半偈先説 同 花心とハ身を捨て半偈を示をと
鬼よろをそいうと心さろをひしもという也
万永 尺尊同位雪山童子といひ時千ふ夜ゐ法を
永ゐ時諸行無常是生滅法とさうをそ今二句ハ創
もろうかとよろうるあそうと有一時童子何とう
食せんとゆあそうき血肉を食せんとう時童子
未法のゐあ則我身をあへて生滅こ已寂滅為楽
の文とさろうゐ也童子ハ尺そる也夜ゐハ帝尺也
巴拠童子ハ永法董ハこい法ゐれハ心さそうさと草
子の地也

。うろふハ 細 老 幼 ろうろう也

つゞうそもひようあまろこうら
すう

ゑひて死あろうとうゆ
さよ雪氏のまやもをまて
ありがあろもそへきん鬼りが
てはまそ身をなぜんとおず
そ。こうろぐこうあ到ぐこぐ
なりもろ。ぐうらこうもひ
物ぐうりで世さをねまうひ
のいてあまかうおぐやをう
ぐうさを。んをまうそぐ。ひう
いこうろふ。あてめぐこと

。心ちの　巴扶　女房えの引歌君のうつりの
始終と云也
。此宮のうつり　細　白宮也

うつりのさまハ　細　中君より此うつりと見とがめ
なくしと大君のうつろふ也

。うへよハ　或扶　大君の性上ハ心あさやうなる
事ゆへ下ハ心ゆくまりくしと

なりおもひつゝけ給ふ　ことをいとゞ物さわ
しくおぼしたり　乃
ありつる四ふたりの事も。此
ことのはてをおもひつゞけ給ふ　細
おもて。人ともよいとゞおびと
めつゝをそすぐ物のうつろふ
うつりもてもてゆくまゝに
はんひとつよ世をそむきはてん
しかたよりつゝあさましきものを
もとうちいでてうち
なるんようにも世ありふべ
まいものかたりとうくあはれ

。こゝやう　或扶　故八宮の遺誡也
。人のかうへと　乗中君のうつろふ君ゝ也

。我心うつ　乗　董の心

よもてあそびでそこのぬし
のうぐひすもなでもおがとも
しよこゝろあるさまなるを
あつこもものさまでつゝ
つゝでどうぞわらうあさ
こをおのれもしらんて
うつろふ世ありふべ
ぬしのうぐひすもなでもおがとも
しよこゝろあるさまなるを
あつこもものさまでつゝ
つゝでどうぞわらうあさ
こをおのれもしらんて
うつろふ世ありふべ

。何人ぞハ　細　永極黄門　これかり山ちとまをそ
とひろんまさ夜ハあるさ雪のきしきまとあり
卅哥卅ろうより出来ろくしきしといつる刊
為家卿の嫌也されも卅哥よおきてハきこと
きてハ也雪のきしひとあるをきさといつる殊勝
。中納言ハ　或抜　忌あろ時ハ是ハと故實と
。月々をのこり　細　四十九日の中也

まどろされてぞあかしつる　日ざろのつきもまされるべき
なれで　第四　めでさこそ
せどぬがりるあさろさ四のこ
うろうをあてこるをそれ
ぬすあるまも　今ろうなのほん
あるほんかのあるべきひ
さてあしまだともく
いでこそろをはしさせ
てあでおてだ日どのをさり
つきせとのあをつでこそ
あろこれもいとろろあ

。今より後の　弄　白官ハ忠あるべきあろとも也
。をの抜ハ白巴抜　これもく中君のれてろ
あるべきとをとを
。ほろくと　或抜　白官の見ハ無音とよくろ
抜へとも中君の返答もろくさきる抜也
。これをいと　細　中君の物ろひ抜へこれさる也

。或ハ多ともそて 或ハ 白官の心多ハ此難儀ようる
ととこさもあへあれともそてよろしき也

。或ハ中君の心よ白官のつらひて
心あるさやうなるハ勿論なれともさうでなき
ととへ
或ハ 白官の心多ようよろひて心あるさと

。うろへ 河 勤事の心也
花 勤ハ人を責勤むる也
乖 勤當也 この対等末巻よりしてよろしき
恨ハへさうをもなくあり
。やうなるさまざまな細々へようろへ
なるそ八此宮八いまさらの恨なさうへ
巴撥 中君山中よりよこしてハ人の心あるさ
ろの恨をもゆへ此のことをも恨とさうへ
ありかたき
。いよ〳〵此君の 細中君の心也此君とハ薫也
。あさまし〳〵 或ハ 白官の恨なり也
。さてさて多 花 是ハ白官九中君よ心多とと
てとへさうもあへさうれと心よるを
さとの恨つるをうれなて恨なとの也
。人やりなす 巴撥 白官のるをさ恨つろ中
君の心よさすろそ物うよ出多也

○ちゃーろと 何 ちゃひゃろまれあまさよ
るりあれいちの社もろてるれあろん

○いてそろ〳〵 巴扱 中君の心 白官れ口るれて偽と也

○さーろと 哥 中君也
細 ろろーろろて行さきいろろと

○中〳〵 或扱 白官の心也
巴扱 返てへてそあろ心也

○ゆ未と哥 白官也 細ゆ未とろ〳〵ありい
ろろ〳〵と今の目此前とろ山きろろと

○へいろろんも 細 白官の心也

○うろんも 巴扱 中君の恨なり

○まてていよ 弄 白官の心より此心をろと也

かりそめ
引あてしめさなどさことを
おもきてれもいでくらら
るまろんとろうもまで
そてつまるれなのて
まさうふ表よのろもを
ろをざめざさ田を
よもんとろまでうろ
とでつくとやあて
さ一方をうのあもうるさ
をめまろもてあふたのしんと
なろあの経中くいぜせろろ

○ものまつせ 或抜 白宮のれ勝ちてく入給也
○いといさう 細 薫の妻也

○まちやうよ 細 白宮のことひ給也
○ひるさる 或抜 大君のり薫れ心也
○此ス中よ 乗 白宮よ
○うち出んよ 細 薫の心ちさまをいふ
ありいふこと

中納言のあづまよりたてまつれ
人やとうふびつしひんなれ
してあまつせふで給を表
もおもてもかんでいてい
やをあをこ智ぐしさすでめ
をひれぐんぐくんて
まあやうよつひ給しま
ふでうるさこのえ
しそやなしあをこんで新あんまを
てもでこころうくくふ
くんこをんなつぐうてこず
すうとわをおこをして月ず

○うかうかうの 乗 薫也

○母ぎみハ 細 白宮の我ガみぎハ妻よ心とハ
をへしこ中君れ心をうしろめたふこと

○うくつれさ 乗 つれる宇治よりおこてかさう
をこをこうれくひしこと也
或抜 中君のつれる恨をお物う遠留いとこと

へをれいうろうのくうも
ひぐうくおいでいよくあさ
ぞよる海あいうをあうぐか
うどこうろうんこをか
くあいうのあが
ろもる海うろうれ
いでんのうをもうこと
もりづきて高ふろうてん
とおどうまるさあう
うもうろうもうく
いまうろうぐふおがぐ
くふいうをおうぐうろうぐ

○これ、三い河いくこれつきうさくよう男をうて
ろくしさりのとおひもうせん
花心くもろりのうをうかしこひいろうしさ物と
くよもうせん

○年のこれさ　細　宇治の反也

○ゆうさこも　細　七日のう也

○くてのこ　細　董のう也

○くおう　或抄　宇治のくくれ心也

○いろくうしおう　或抄　大君のこれ行て時のう也

○時く　細　そしてし董世うやよ八官の山時よう
まうう行てう

○今八ことうよ 或抄 萱の此段後に出もめしと

○み宮より 或抄 白宮より宇治へひつくを

○后のみや 乗 明石中宮也
或抄 中君を京へ渡し給へきよしをことうより出
ことのほくるまの註をしる

○これも 或抄 白宮も薫も也

なくけうとうづるおとこもまあ
かりそうもおもひあまりおもひ
のこころをいはでこのままにて
やみなんもいとくちをしうこ
ひとをもうきものにおもはれ
てうのみやうもをもうまうま
くもいとこころをこのうへ
にてらうたきものにおもひ
はなちてこころをつくし
きこのこやきこころつれて
もうくおもうのみまさりの道
てあるにいぢめをするがひ
がうこころにもあらめ

○廿一宮の 花 廿一宮の此ことよ白宮のひとへ
その類よりみなその心と心えうく上よ有
乗 廿一宮 此みやつくるよしおかとやと
白宮のおぼす也
○あるつるも巴抄 系へうてかそいあるうるま
かしとく
○さうなりうし 或抄 中宮のひかりて二条院へ
うつろひ給とさ給ひて也
○三条のみや 細 我も三条のみやをつくりて
大君をうつしなんさりのとく
○このひかりよ 花 薫の中君ひるとの給也

○みやのおもひ 花 中君を二条院へうつしなん
との給ふをおもひさるよしの給
盃 花鳥説うつ 白宮の薫をうさうひ給
ふおもひよりくとて中君のうしろを

とこころづくりおきて二条院の
内のさまいとうつくしくしなして
もうけ給ふべくもあらぬ
ほどのものやとおぼしたり
ける中にもこの中君のことを
よそてはおぼしおとすべくも
おぼしたらずやうやうおとなび
給ふままに心ばへなどもいと
のどやかにおもひやりふかく
うちとけてはあらねどはづかしき
ことをばうちおもてにもいでず
のおぼしたるさまなどいと

ちがへさせ
○大きさの比後又は細悉皆の比後見董乃
汰すてゝいと与ろ也

まぎるゝことなどひとをおもふこゝろのいろこゝろにかゝるべしとやみそもじとおぼえたり